

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 平成 21年度
地域づくり総務大臣表彰

3

2010

ISSN 1340-8917



平戸港を見下ろす平戸城



寺院と教会が見える風景



幸橋 (オランダ橋)



田平天主堂 (カトリック田平教会)

1 巻頭エッセー ● 頭を雲の上に出すふじのくにの地域づくり 川勝平太 (静岡県知事)

特集 平成21年度 地域づくり総務大臣表彰

4 平成21年度 地域づくり総務大臣表彰

大賞は北海道旭川市に 二十五団体・三個人の功績たたえる

大賞 (1団体)

●北海道旭川市【北海道】6

団体表彰 (計20団体)

●NPO法人 アルテピアッツァびばい【北海道美瑛市】7 ●青森地区自治会【岩手県宮古市】8 ●NPO法人 鳴子の米プロジェクト【宮城県大崎市】9 ●湯船保存会【秋田県湯上市】10 ●心といのちを考える会【秋田県藤里町】11 ●NPO法人 きらりよしじまネットワーク【山形県川西町】12 ●足利市くらしの会【栃木県足利市】13 ●まちの駅ネットワーク本庄【埼玉県本庄市】14 ●常盤平団地自治会【千葉県松戸市】15 ●小平市グリーンロード推進協議会【東京都小平市】16 ●初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会【神奈川県横浜市】17 ●学生との連携によるうるしの里活性化実行委員会【福井県鯖江市】18 ●種蔵を守り育む会【岐阜県飛騨市】19 ●あかばね塾【愛知県田原市】20 ●こうべUD広場 (こうべユニバーサルデザイン推進会議)【兵庫県神戸市】21 ●NPO法人 とさはちきんねっと【高知県高知市】22 ●子ども夜市実行委員会【福岡県飯塚市】27 ●B級グルメの聖地久留米実行委員会【福岡県久留米市】28 ●山鹿温泉観光協会【熊本県山鹿市】29 ●大隅の國やっちく松山藩【鹿児島県志布志市】30

地方自治体表彰 (計4団体)

●東京都江戸川区【東京都】31 ●福井県小浜市【福井県】32 ●兵庫県【兵庫県】33 ●愛媛県東温市【愛媛県】34

個人表彰 (計3名)

●村上龍男氏【山形県鶴岡市】35 ●渋谷秀逸氏【長野県阿智村】36 ●梶 誠氏【愛知県豊田市】37

レギュラーレポート 38

自治体アンテナショップ

物産品PR、地域情報発信で効果 ふるさと情報プラザ・畠田千鶴

40

平成21年度地域づくり海外調査研究事業 (2)

独仏に見る地方公共交通と景観・デザイン都市づくり

全国地域リーダー養成塾

42 調査地で学んだまちづくりの精神

埼玉県行田市・菅原広志

43 地域の「宝物」を継承する取り組み

岩手県・女鹿智恵

44 まちを想う熱意が地域を元気に

茨城県桜川市・中野恵実

45 首長の思い 自立とやすらぎの都市を目指して 栗川 仁 (那須塩原市長)

48 センター通信

グラビア

2・23 平成21年度 地域づくり総務大臣表彰

46 都道府県漫遊●和歌山県 47 手前みそですが…●富山県氷見市



参加者の中には関東方面からの親子も

●表紙「子泣き相撲」

(長崎県平戸市)

長崎県平戸市の最教寺。弘法大師空海が唐から帰国して初めて護摩をたいた地とされ、別名「西の高野山」と呼ばれる。この寺に伝わる伝統行事「子泣き相撲」が二月三日、行われた。

生後一歳前後の赤ちゃんを抱きかかえた、二百数十組のパパやママが集合。境内に張られたテントの中で、法被や鉢巻姿の赤ちゃんが保護者とともに登場して対戦する。「ハッケヨイ、ノコッター」の声に、先に泣いたほうが勝ちとなる。

土俵(舞台)では、泣かずにケロッとして、ニコニコ顔の赤ちゃんも多く、行司や親たちはひと苦労。泣いても笑っても、周囲の大人たちから笑いがこぼれた。

最教寺は、平戸藩初代藩主の松浦慎信氏が一六〇七年に建立した。当時、慎信が亡霊に悩まされていたある日、寺に参詣したところ赤子の泣き声で亡霊が退散し、その後、悩まされなくなったと伝えられる。

毎年、節分の日に催される「子泣き相撲」は、これが由来とされている。

●文「原田」 ●カメラ「小形又男」



静岡県知事 ● 川勝平太

頭を雲の上に出す ふじのくにの地域づくり

昨年末から足掛け三年にわたって放映されるテレビドラマ『坂の上の雲』が話題です。西洋近代国家を目指して明治時代を駆け抜けた青年群像を描いた司馬遼太郎氏の名作が、発表から四十年を経た現在、あらためて注目を集めています。時代の大転換期にあつて、新たな理想の国家、社会を確立しようと懸命に生きた主人公たちの姿が、人々の共感を呼ぶ故かも知れません。

明治以降日本は、西洋列強に肩を並べる一等国たらんと、戦前は軍事力に、戦後は経済力に国力の重心を置いて成長を続けてきました。そして、とうとう経済力で世界の先頭に立ったことを証明したのが一九八五年のプラザ合意です。この時点で、日本人は「坂の上の雲」に到達したと言つてよいでしょう。それはまた、明治・大正・昭和と、東京に国力を集中し西洋文明を取り入れてきた、いわば「東京時代」に区切りが付いたということでもあります。

明治以来の目標を実現した今、二十一世紀の日本は何を国力の柱とするべきでしょうか。私は、軍事力や経済力にも増して「文化力」が必要になると考えています。二十世紀の終盤、国際社会においては地球環境の重要性に関する共通の認識が形成され、国内では物の豊かさより心の豊かさを重視する人が増えました。人々の生き方やその総体としての国の品格、すなわち「文化」が問われる時代が到来しています。私たちの地域のたまたまいが人々の憧れを集めるとき、文化力を持つのです。

文化力がもの言う時代には、国のかたちにもそれに相応しいものが求められます。現在の都道府県制は中央集権的に富国強兵を進めた時代のものであり、脱東京・地域分権が必要です。国土の文化的景観を考慮すれば、北海道・東北の「森の洲」、関東の「野の洲」、中部の「山の洲」、そして西日本の「海の洲」が考えられます。先進国に匹敵する経済力を保持しつつ、多様な地域の文化が花開くよう、

日本を四つの地域に分けて、東京に集中している権限・財源・人材を移譲してはどうでしょう。

これらの四洲の運営には都道府県の区域を越えた広域的な行政能力が必須です。国は中央省庁の出先機関に権限・財源・人材を移し、都道府県は合併等で廃止した上で、一体となって運営に当たるのが有効かつ現実的でしょう。現在、分権方策の一環として出先機関の原則廃止が唱えられています。都道府県の発展的解消に向けての自己変革に蓋をした、不誠実な議論と言わざるを得ません。

国のかたちを変えるには時間を要します。まずはそれぞれの地域が、独立不羈の覚悟で、持てる「場の力」を最大限に活かし文化力すなわち地域の魅力を高めるほかありません。静岡県では、そうした地域づくりのモデルになるという気概で、「ふじのくに」づくりに取り組んでいます。本県が目指す姿を、坂の上の雲のさらに上に、高々とそびえる富士山になぞらえ、名実ともに内外から憧れを集める地域になるという決意を込めて呼ぶ名が「ふじのくに」です。「富士」と書けば、豊かで、学徳のある人士が集う国です。また「不二」と表記すれば、世に二つとない国であり、「不死」だと長寿の国でもあります。

静岡県では昨年末に条例を定め、二月二十三日を「富士山の日」としました。すべての県民が「ふじのくに」のシンボルたる富士山に想いを馳せる日です。「ふじのくに」は静岡県の尊称であると同時に、日本を讃える名称でもあります。日本全国には富士の名を冠した三百四十もの「ふるさと富士」が存在します。各地の富士が地域自立の風土的な拠点になればと祈念し、ふるさと富士を抱く首長の皆様にとともに富士山の日を祝いましょうと呼び掛けました。御賛同いただいた皆様にお礼を申し上げます。この日が今後、それぞれの富士を寿ぎ、地域のことを考える記念日になっていくことを願っています。

平成21年度 地域づくり総務大臣表彰

大賞 北海道旭川市



嵐山から望む旭川市。川や大雪山連峰が美しい（左）旭山動物園「あざらし館」のマリンウェイ（右） ● 北海道旭川市（p6）



青倉地区自治会 ● 岩手県宮古市（p8）
「けげだす村工房まつり」のもちまき大会



NPO 法人アルテピアッツァびばい ● 北海道美唄市（p7）
広大な敷地に 40 点以上の彫刻が点在する



NPO 法人鳴子の米プロジェクト
● 宮城県大崎市（p9）
稲刈り杭がけ交流会（左）
学生の稲刈り杭がけ応援隊（右）



心といのちを考える会 ● 秋田県藤里町 (p11)
住民が気軽に集い話せるコーヒーサロン「よってたもれ」



かたがね
潟船保存会 ● 秋田県潟上市 (p10)
八郎潟の残存湖岸に水草を植栽する



足利市くらしの会 ● 栃木県足利市 (p13)
制服リサイクルバンクを支えるメンバー



NPO 法人きらりよしじまネットワーク ● 山形県川西町 (p12)
わんぱくキッズスクールの子どもたち



まちの駅ネットワーク本庄 ● 埼玉県本庄市 (p14)
「まちの駅」から広がる交流の輪

大賞は北海道旭川市に 二十五団体・三個人の功績たたえる

地域の個性豊かな発想を活かし、魅力あふれる地域づくりに顕著な功績のあった、まちづくり団体や民間企業、個人および地方自治体を表彰する平成二十一年度地域づくり総務大臣表彰が一月十二日、東京・千代田区のグランドアーク半蔵門で行われた。

表彰式では、小川淳也大臣政務官が受賞各団体・個人の地域づくり活動の業績や情熱をたたえ、地域人材育成への期待や、さらなる地域活性化への寄与を願う式辞を述べ、旭川市など二十五団体と三名の個人に表彰状を授与した。

これに続き、大賞を受賞した旭川市の西川将人市長が「旭山動物園」を軸にした取り組みの状況を紹介したほか、団体表彰を受けた特定非営利活動法人アルテピアッツァびばいの磯田憲一理事長らが活動事例を披露した。

今回の表彰数は、昨年度（大賞は該当なし）の団体表彰（二十五団体）、個人表彰（四組五名）の計二十五団体・四組五名に比べ、個人表彰部

門で一組二名の減となった。

選定に際しては、「この地域ではこれがベスト」「このような活動がこの地域を良くする」といった判断に基づき、都道府県および地域づくり懇談会構成員からの推薦を受けたもの及び今回からはより多くの事例を募集するため、認められた「自薦」の中から選ばれた。

この表彰の趣旨は「地域を良くしようとする」団体・個人を表彰するというもので、審査基準は以下のような点である。

①他の模範となる先進的な取り組み、ユニークさや創意工夫ある取り組み、地域独自の歴史的・地理的・社会的特性を活かした取り組みなどの先進性・独自性、②活動の継続性や効果・実績の定着性、③規模の拡大や内容の多様性、他地域への波及性など発展性、④自主的・主体的な取り組み、⑤住民と行政の協働性、住民や国・県との連携性、⑥住民の満足度、地域の活性化、雇用の創出、新たな地域文化の創造、地



受賞団体・受賞者一覧

大賞 〈1 団体〉

北海道旭川市

【北海道】

団体表彰 〈計20団体〉

特定非営利活動法人アルテピアッツァびばい	【北海道美瑛市】
青倉地区自治会	【岩手県宮古市】
特定非営利活動法人鳴子の米プロジェクト	【宮城県大崎市】
潟船保存会	【秋田県潟上市】
心といのちを考える会	【秋田県藤里町】
特定非営利活動法人	
きらりよしじまネットワーク	【山形県川西町】
足利市くらしの会	【栃木県足利市】
まちの駅ネットワーク本庄	【埼玉県本庄市】
常盤平団地自治会	【千葉県松戸市】
小平市グリーンロード推進協議会	【東京都小平市】
初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会	【神奈川県横浜市】
学生との連携による	
うるしの里活性化実行委員会	【福井県鯖江市】
種蔵を守り育む会	【岐阜県飛騨市】
あかばね塾	【愛知県田原市】
こうべUD広場	
(こうべユニバーサルデザイン推進会議)	【兵庫県神戸市】
特定非営利活動法人とさはちきんねっと	【高知県高知市】
子ども夜市実行委員会	【福岡県飯塚市】
B級グルメの聖地久留米実行委員会	【福岡県久留米市】
山鹿温泉観光協会	【熊本県山鹿市】
大隅の國やちく松山藩	【鹿児島県志布志市】

地方自治体表彰 〈計4 団体〉

東京都江戸川区	【東京都】
福井県小浜市	【福井県】
兵庫県	【兵庫県】
愛媛県東温市	【愛媛県】

個人表彰 〈計3名〉

村上龍男氏	【山形県鶴岡市】
渋谷秀逸氏	【長野県阿智村】
梶 誠氏	【愛知県豊田市】

合計 25団体、3名

大賞

域の知名度やイメージ向上などの効果、⑦各表彰の種類に関しての優れた功績がある

全推薦事例の中から、特に優れているものに対して授与する。二十一年度は旭川市の旭山動物園の取り組みが受賞した。

団体表彰

地方をより良くしようと尽力した団体を表彰する。「地域を良くする」という言葉には、経

地方自治体表彰 (頑張る地方応援表彰)

頑張る地方応援プログラムの推進を目的として、地方独自のプロジェクトを自ら考え、前向きに取り組む自治体を表彰する。東京都江戸川

済の活性化や伝統文化の維持、国際交流、コミュニケーションづくりなど、さまざまな解釈がある。あらかじめ細かく要件を指定することを受け、現場の実情を踏まえた判断を尊重し、全国二十団体を選出した。

個人表彰

区など四団体が選出された。

個性豊かで活力あふれる地域づくりのため、自ら率先し、地域づくりに貢献している個人を選出する。今回は山形県鶴岡市の村上龍男氏ら三名が選ばれた。地域づくりに活躍する個人の功績をたたえ、地域づくりのさらなる進展を目指すのが狙いである。これらの表彰を通じて、地域づくりへの情熱や想いを高め、豊かで活力ある地域社会の構築が図られることが期待される。

旭山動物園を核に

地域経済を活性化



市長 ● 西川将人

旭川市は北海道のほぼ中央に位置し、秀麗大雪を望む道北地域の中心都市である。大雪山連峰を水源とする石狩川が市の中心部を貫流し、牛

奇跡の復活を遂げた動物園

朱別川、忠別川、美瑛川が合流する「川のまち」であり、夏と冬の気温差が約五十度を超える典型的な内陸型気候を有し、明治三十五年（一九〇二年）に記録した氷点下四一・〇度は、日本最低気温公式記録となっている。

平成十二年四月一日に道内初の中核市に移行し「人が輝く北の文化のかおるまち」を、目指す都市像として掲げ、市民が高い志と誇りを持ちながら、いつまでも住み続けたいと思えるまちづくりを進めている。

また、当市の人口は約三十五万四千だが、年間にその約十八倍を超

える六百七十万人以上の観光客が訪れる観光都市でもある。

多量の観光客にお越しいただけるようになったのは、旭山動物園効果のお陰だが、この旭山動物園にも廃園の危機があった。

最大の危機は、平成六年に飼育動物の感染症による死に伴い、年度途中に閉園したことである。

しかし、閉園中も旭山動物園の復活を

願う市民から寄せられた数々の激励は、落胆していた職員の原動力となり、奇跡の復活を遂げるきっかけになったのである。

旭山動物園の取り組みは、単なる「入園者の増加」（最低入園者数は平成八年度の約二十六万人、最高入園者数は平成十九年度の約三百七万人）を目的としたものではない。

動物が本来持っている能力を最大限に生かし、それをお客様に見ていただきたいということであり、これが従来の動物園での展示方法であった動物の姿形を見せる「形態展示」から「行動展示」へのチェンジである。今では多くの動物園がこの手法を採り入れている。

こうした職員による創意工夫に加え、旭山動物園に足を運んでくれる市民、NPO法人旭山動物園くらぶ

等の市民団体をはじめ、オール旭川で旭山動物園を支えてきたことが評価され、今回の地域づくり総務大臣表彰（大賞）受賞につながったのではないかと考えている。

豊かな「食」の基地として
今秋にイベント開催も

当市には旭山動物園以外にも、安全でおいしい農産物、優れたものづくりの技術など、多くの地域資源がある。今年には明治二十三年九月に旭川村が誕生して百二十周年という節目の年であり、旭川市が市制を施行して八十八年に当たり、当市が「米寿」を迎える年である。

本年十月には、当市と道北各地の味覚を一堂に集め巨大な市場を中心市街地に作り、「食」をテーマにしたイベント開催を計画している。

このイベントを通して安全で安心な食と環境、健康を柱としたまちづくりについて市民と一緒に考えていくとともに、多彩で豊かな食の供給基地であることを全国に向けてアピールし、道内外への販路拡大の契機とするなど、今後も官民協働で地域経済の活性化につなげていきたい。

皆さんもぜひ一度「旭川市」に超越してください。



旭山動物園の「ペンギン館」

NPO法人アルテピアッツアびばい

自然と彫刻が融合し、
新しい豊かさを創造

理事長 ● 磯田憲一

「アルテピアッツア美唄」——イタリア語で「芸術広場」と名付けられた空間は、彫刻家・安田侃が日本でアトリエを探していた時に出会った場所だ。自然と彫刻が融合し、不思議な場のエネルギーをたたえる空間は、多くの人たちが心を寄せつつあるが、この空間の今を紹介するには、北海道美唄の歴史から、まず語らなければならない。

炭鉱の灯が消え、小学校も廃校に……

美唄市は、産炭地として栄え、ピーク時の人口は九万二千人を数えた。しかしエネルギー革命の中で、一九七三年には美唄から全ての炭鉱の灯が消え、炭鉱マンの多くは心ならずも美唄に別れを告げた。

そうした中で、最盛期千二百五十人が在籍した旧市立栄小学校が、併

設されている栄幼稚園を残して閉校したのは、八一年三月。一方、美唄生まれの安田侃は東京芸術大学を修了し、七〇年、イタリアへ渡る。

以来、フィレンツェに近いピエトラサンタで、創作活動を続けた。大理石はそこで出会った運命の素材だが、炭鉱街で育った少年時代、目と心に焼き付けた「黒ダイヤ」とも形容された石炭の輝きを、安田は大理石に重ね合わせたに違いない。

二十年余りを経て再会した、雑草の中に佇む旧栄小の木造校舎。安田の心を捉えたのは、時代に翻弄された歴史など知らずに無心に遊ぶ幼稚園児の姿だった。「この子どもたちが心をひろげられ



こころを彫る授業



「妙夢」と旧校舎

る広場をつくらう」。その思いがアルテ創造の確かな灯となったのである。アルテは九二年にオープンした。七万平方メートルを超す敷地に、四十点以上の彫刻がそれぞれの空間に溶け込むように置かれている。

広場中央の大理石で組まれた水の広場は、夏には子どもたちの歓声であふれる。かつて炭鉱街を走りまわった子どもたちの歓声と、今、無心に水遊びに興じる子どもたちの声が混じり合い、アルテの丘にこだまする。それは、人智の計算を超えた不思議な響きとなって私たちの胸を打つ。

郷土出身の彫刻家の
アートが新たな絆に

二〇〇五年八月、アルテの運営主体として、NPO法人「アルテピアッツアびばい」が設立された。厳しさを増す経済情勢下で、困難を抱えたスタートではあった。

何せ、数千万円に及ぶ維持費を「入

場料」を取らずに賄うと決めたのだ。アルテは訪れる人々が静かに自分と向き合える空間。その価値は来訪者の数では推し量れない。私たちは来訪者数に依拠する従来型の運営を超えようと決意した。

アルテは、なぜか訪れる人の「懐かしい」記憶を呼び覚まし、心を和ませた人たちは「また来ます」と言いながら帰途につく。その不思議な力は何なのか。

それは、今そこにある「彫刻の価値」や「緑の佇まい」を語るだけでは説明できない。地底を掘ることの誇りと苦しみ。活況の陰で事故によって地底に果てた人たちの無念。心ならずも故郷を捨てなければならなかった人々の涙……。そうした切ない過去の集積も私たちの今に力を与えてくれるかと思えてならない。

「アルテピアッツアびばい」の活動は、これまでの「成長」の物差しを超えて、アートと地域との絆を通して、豊かさの新しい基軸を創造する挑戦である。

そのアルテは間もなく十八年を迎える。行く手にはさまざまな壁があることだろう。だが、日本にも世界にも稀な「アルテづくり」の道を、そこに加わることでできる喜びを胸に、歩き続けていきたいと思う。

15世帯の村に千人集まる 農産加工の工房まつり



会長 ● 高岩幸一

岩手県宮古市。海の町だが、青倉地区は海岸から十キロほど奥まった中山間地にあり、わずか十五世帯が点在する農林業を営む小さな地区だ。少子高齢化も進んでいる。

この小さな地区に秋の一日、千人を超す来客がある。「けげだす村工房まつり」が目的である。

「けげだす」とは当地の方言で、「思いつく」という意味だ。道は狭いし、専用の駐車場などない。それでも何とか工夫し、地区外から訪れる人びとを受け入れている。

五十年前は二十一世帯、百六十三人だったが、現在は十五世帯、五十三人。うち小中学生は七人、六十五歳以上は二十人（高齢化率三七％）となっている。学区唯一の小学校分校は昭和六十二年に閉校した。地区では米、シイタケ、雑穀など



「けげだす村工房」を核にまつりは開かれる



豆腐田楽など人気が高い。子供も戦力だ

を作り、畜産も行っている。昭和五十八年から転作田で大豆栽培を本格的に始め、それまで自家製だった豆腐や味噌などの農産加工品を共同作業で製造し、各種イベントや季節行事などへの出品を始めた。固定客もつくようになった。

思い出す懐かしい味

平成六年度から地区に農産加工団体

験施設、水車、炭焼き小屋などが行政によって整備された。話し合いの中で、そのうちの一つを「けげだす村工房」と名付けた。

「立派な施設を造ってもらった。自分たちだけで使うのではなく、何か地域外の皆さんにお礼がしたい」そう話し合ううち、「まつり」ということになった。何ができるか。地元産品を使って地元料理などを提供し、昔を「けげだして（思い出し）もらおう」と、平成九年からまつりを始めた。

農産物や豆腐、味噌、田楽などの販売、けげだす鍋の無料提供、隣接地区に伝わる神楽の披露、イワナつかみ捕りやもちまき大会などだ。

どうやって宣伝し、来てもらおうか。町内（当時は田老町。平成十七年、合併し宮古市）や宮古市などにポスターを貼らせてもらい、新聞折り込みも入れた。

手作りで準備したまつり。「お客さんは来てくれるだろうか」との不安もあったが、平成九年十月二十六日の日曜

日、予想以上の人出となった。集計したら五百人だった。みんな「おいしい」と言ってくれる。口コミ効果もあったようで、翌年は倍増した。

その後、千数百人の来客で推移している。けげだす鍋は無料サービスで毎年、千食出している。客の増加はうれしい悲鳴ではあるが、駐車場では客に迷惑の掛けっ放しだ。昨年はバスを運行してみたが、駐車場対策というより、交通手段のない高齢者に好評だった。

「結い」は参画と協働

十三年が経過し、確実に高齢化していく中で人手も不足がちだが、最近では地区出身者や、数十年前も交流運動会を続けている、ひと山越えた隣接地区からも手伝いに来る。

十五世帯で継続してきたまつり。秋の一日の大にぎわい。「結い」でつながっている地区が、全員で運営するまつりを通じ、さらに連携し一体となり、地区民みんなの自信にもなっている。参画と協働そのものだと思っている。

来客に再訪の方も多く、笑顔で帰ってくれる。年々遠方の客も多くなっている。これからも、昔の料理や行事を大切にしながら、多くの来客と接していきたい。

NPO法人鳴子の米プロジェクト

地域で農業を守る取り組み



理事長 ● 上野健夫

宮城県大崎市「鳴子温泉」。ここは古くから温泉地として知られ、多くの観光客が訪れるが、一方で山間地の厳しい地理的、気候的条件の中で先祖から受け継いだ田畑を耕し、人間の生活の原点である米作りも脈々と続けられてきた。

しかし、集約化や効率化を目指す国の政策には及びもしない不便で小さな農地は、農村の過疎化や高齢化にも拍車をかけ、ここ十年で百畝もの水田がなくなってしまう。

山間地でも無理なく作れる米を栽培

美しい鳴子の田園風景をなくさないために、鳴子の農業を地域のみんなの力で守っていかう。そんな想いからプロジェクトは始まった。プロジェクトが目指したのは三つある。

第一は、農家が安心して米作りを

継続できるような、お米の価格（農家手取り価格一俵一万八千円）を設定することである。

少し高くても地域の皆が買い支える（購入価格一俵二万四千円、差額の六千円は組織の運営費や若者の育成に充当）ことで農家を応援する。

山間地でも無理なく作れる、新しい希望の米「ゆきむすび」（プロジェクトで命名）を栽培し、作り手となぎ手、食べ手の新しい信頼関係を築いていく。

都市部では食の安心・安全などよく言われるが、一方的な関係でとらえるのではなく、それぞれの立場を理解し合うことを心がけ、信頼関係を深めてきたことで、地元のホテルや旅館がこの米をお客様に提供することなど、鳴子で長年できなかった地消地産にもつながっている。

第二は、幅広いお米の食べ方を研究し、ごはんの消費を増やすとともに、地域の伝統的な食文化を地元の器とともに提案しながら、農の情報を発信していくこと。

もっちりとした食感が特徴の、ゆきむすびはお母さんたちの協力で、伝統野菜や地域に伝わる食文化とともに多彩なおむすびになり、鳴子の木を使った器も職人の協力でき上がった。

毎年、お米を予約してくれる約七百人もの「食べ手」に応援していただいているが、より多くの人々に「農」に関わってもらうための入口として、おむすび屋「鳴子の米プロジェクトおむすびや」を昨年末オープンした。



田植え・稲刈り交流会のあと、田んぼお座敷になる

若い世代の農業学習を支援

プロジェクトの第三は、若い世代が、農や地域を学ぶ場の提供と支援を行っていくことである。大変ではあるが昔からの秋の風景である稲の杭掛け（自然乾燥）を守っている。

モノではなく、農家の働く姿や杭掛けの風景こそが、食や農の大切さを理解するきっかけになるからだ。

昨年は多くの学生が稲刈りや杭掛け作業に足を運んでくれた。彼らの思いと力は、高齢化した農村・農家の貴重な労力ややる気になり、新しい風を吹き込んでくれた。

私たちは、地元で暮らす若者はもちろん、学びたい人、応援したい人も含め、積極的な支援と協力関係を構築していきたい。

中山間地で暮らす人々は、多くの地域で私たちのような問題に直面しているのが現実だ。宮城県内や他県でも、小さなエリアで農を支え合う取り組みが始まっている。

このような取り組みが、地域の実情に合わせた形で全国に広がり、地方が元気になっていけばいいと思う。今後もしいろいろな地域と情報交換しながら、私たちも前に進んでいきたい。

八郎太郎の願い



副会長 ● 加賀谷 勲

「八郎潟の原風景を取り戻し
後世に残したい」を合言葉に

八郎潟の干拓事業は昭和三十二年（一九五七年）に着工された。干拓前は琵琶湖に次ぐ日本第二の湖面を誇り、漁場としても魚の宝庫だった。しかし、干拓後の漁獲量は激減し、漁業離れから漁船も放置され朽ちていくのを見かねて保存活動をしたのが、湖再生運動の発端だった。

残存湖の水質も年々悪化し、アオコが発生する瀕死の状態の湖と化した。「これではいけない。何とかして原風景ときれいな水を取り戻そう。百年かけても手を尽くそう」と決心したのは、郷土の歴史を語る会「史談会」のメンバー二十一人。

石川会長を中心に三浦事務局長が立ち上がり、平均年齢は七十歳。「モッタイナイ！」の精神を保ちな

がらも、高度成長期を駆け抜けてきた者たちだ。

定年退職後の生涯学習

振り返れば、郷土の環境は耕地整理や開発で潟も小川も沼も消え、トンボもメダカも棲めない寂しい自然になっていった。自然環境を残せない責任を感じる。会員の多くは定年退職後の生涯学習が目的だった。

活動と言っても、八郎潟の残存湖は広い。周囲三十五キロメートルあるといわれている。また、堤防建設の効率化から急に深くなっており、岸には植物は生えない状態。土を入れ粗朶で消波提を造り、水草を植栽することから始めなければならぬ。気の遠くなる大仕事への挑戦である。

幸い県からの補助を受け活動が始まった。地域の暖かい理解と漁協の

協力、周辺小学校の協力も得られた。児童たちの野外授業の一環として、PTAやボランティアが参加した植栽の日。私はこの活動に参加して本当に幸せだと感じた。子どもたちの歓声に自分たちの憧憬が重なり、郷愁がよみがえってきた。植栽と水辺の虫や魚、生き物に戯れ無邪気に遊ぶ、今も変わらない自分もそこにいた…。

楽しさを共有できた子どもたちには、この植栽を通じた感動と人の輪で環境を大事にする次代の担い手に育ってほしいと願う。自然環境と生態系学習の場を自らの手で創出している、幸せなひと時である。

活動とともに人の輪が広がる

この活動には県地域振興局、秋田県立大学が強い後押しをしている。活動を通じ

て先進地の視察や多くのフォーラムにも参加した。郷土愛と環境を守ろうと熱心に活動している仲間とグループ



校内ビオトープでの作業風景



湖岸での植栽には子どもも参加

が数多くあることを知り、心を強くした。

フォーラムはさながら展示会のようである。ゴミや廃棄物を資源化し、知恵と経験をフルに活かした環境にやさしい創造的活動に新しい発見をする。連携の輪が大きく広がり、産学官と市民が一体となり八郎潟の自然と人材を活かし、地域の発展と活性化につながればいいと思う。

本会の働きかけで開設した「潟の民俗展示室」(グリーンランドタワー内)などは、知られざる名所となっている。個々人の力は微力でも、今や大きなうねりとなって動き出している。ボランティアに参加するたびに大きなパワーをいただいている。

総務大臣表彰は全市民と共に喜びを分かち合い、「八郎太郎の夢」に向け今後の活動の励みにしたい。

心といのちを考える会

地域のつながりを創れば

自殺は防げる



会長 ● 袴田俊英

日本の自殺者は十一年連続三万人を超えている。自殺率はG8諸国の中ではロシアについて二位、アメリカの二倍、イギリスの三倍になっている。この異常な状況に、政府も平成十八年に自殺対策基本法を制定し対策を行うことになった。

秋田県は平成七年以来、十五年連続で自殺率日本一である。しかし、それゆえに自殺対策では全国に一步先んじた活動が行われている。

『ワースト』の汚名返上へ

大まかにくれば、自殺予防活動は二つに分けられる。一つは相談型、もう一つが地域づくり型である。

相談型は「いのちの電話」に代表される悩み相談や、多重債務の整理などの窓口相談が挙げられる。これは個別に自殺要因を取り除くことで

対応していこうとするものである。地域づくり型は地域のつながりを創り、自殺念慮者の孤立を防ぐことで対応しようとするものだ。「心といのちを考える会」は後者に当たる。

平成十二年、藤里町で会の活動が始まった。藤里町は世界遺産白神山地を境に青森県と接する人口四千人の小さな町である。活動を行う前の自殺率は約七〇（人口十万人当たりの数値）。平均三〜四人が亡くなっていた。全国トップの秋田県の数値の約二倍になるほど高い。これを憂えた有志が集まってできた会だ。

といっても自殺は町の中で「タブー」であった。自殺率が高いため、町民の誰もが自殺した人と何らかの関りがあった。そっとしておくことが優しさであると皆が思っていた。その中で自殺予防の会を立ち上げる

のは、正直難しかった。

会が結成されるきっかけは、秋田県が自殺対策に乗り出した最初の事業に、町の有志二十三人と参加したことにあった。内容は自殺とうつの関連についての講演会であった。

うつ病治療は精神科が行うが、精神病院への偏見が強く治療もできずに自殺で亡くなっていくという現状を聞き、これは住民の問題であると皆が感じた。この話を町民に聞いてもらおう。そのために会を結成しよう。話はトントン拍子に進み、「心といのちを考える会」という名称で活動を開始した。

取り組んだ自殺予防策が奏功

最初にやったことは、やはりうつ病についての勉強会だった。講演会、勉強会という講座形式の集まりを続けていくうちに、やがて会員から不満が聞かれた。

「勉強会ばかりでは自殺を減らすことはできない。実際に私たちができる自殺予防をやりたい」

そこで始まったのがコーヒーサロン「よつてたもれ」。京都の雅言葉が北前船

文化としてこの地に伝わり残ったもので、「どうぞお寄りください」という意味の丁寧語である。

このサロンが始まったのが平成十五年。十六年には自殺者がゼロになった。その後、減少傾向を示し喜んでいた十九年、五人が自殺で亡くなった。全員男性であった。

男性は講演会にもコーヒーサロンにもあまり参加してくれない。そこで考えたのが赤ちようちん「よつてたもれ」。夜に地域の集会所に向き、男性を中心に一杯やって話をすると、ただそれだけのことである。だが、それだけのことで翌二十年の自殺者は再びゼロになった。つながりを創れば自殺は防ぐことができる。このたび、私どもの自殺予防の活動が「地域づくり」という点で評価されたことを大変うれしく思っている。



心といのちを考える会のメンバー



男性には一杯飲みながらの交流が予防策に

NPO法人きらりよしじまネットワーク

住民総出の地域づくりを实践



事務局長

● 高橋由和

山形県川西町は、米沢市の北側に位置し、置賜盆地のほぼ中央にある人口約一万八千人の、稲作を中心とした農業のまちである。一面に広がる緑の水田は、米どころ川西の象徴ともいえる。

その川西町の最も東に、私たちが住む吉島地区がある。人口約二千九

百人、戸数七百五十二戸。町を代表する農業主体の地域である。

吉島地区の地域づくりは、昭和四十八年から、地区公民館活動を振興する吉島地区社会教育振興会が生涯学習を中心に進めてきた。

しかし、急速な少子高齢化、社会経済の変動による勤務形態の変化、住民個々人の価値観の多様化などに

より、住民の暮らしに対するニーズも大きく変わり、支え合いや自治の連帯意識も年を数えることに希薄化している現実があった。

自主防災組織、子ども教室 高齢者の生涯学習も

吉島地区は、地域づくりをもっと広い視野で、住民課題をテーマ別に取り上げるため、平成十九年九月に地区を代表する五つの団体と連携した。

会計の一元化と地域活動の合意を形成し、地域にとって「本当に必要なものを見極められる地域」を目指し、地域経営をする全世帯が加入する新たな組織、「特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク」として生まれ変わった。

地区の安心・安全の約束として自主防災組織をつくり、独自の防災無線を配備し、災害時の伝達訓練を毎年行ってきた。

また、学校との連携の中で子どもたちを見

守り、余裕教室を活用した高齢者のための生涯学習と介護予防を併せ持つ「燦燦塾」を開講した。

さらに子どもたちを対象とした「わんぱくキッズスクール」と、地産地消のネットショップ運営などにも取り組んできた。

地域住民だからこそ 可能な解決策を見出す

住民ができることとできないことを見極め、地域の多様な資源を総合力として活かし、地域に住む住民だからこそできる解決方法を見出し、自らが解決していこうという姿勢で取り組んでいる。

私たちは、地域住民が地域の経営者の一人として、地域づくりに参画し、地域づくりの計画を自ら実行して住民主体の地域づくり活動を、全国に向けて発信できるよう取り組んでいこうと考えている。

そのためには、地域や町の枠を越えて、さらなる広域、そして公益的なネットワークコミュニティを構築する必要がある。

多様化する社会情勢に対応できる協働のパートナーとして、質の高いコミュニティと体力のある自治を再生しなくてはならないと考えている。



自主防災組織には独自の無線も配備



高齢者のための「燦燦塾」



子どもたちを対象に「わんぱくキッズスクール」

足利市くらしの会

栃木県足利市

制服リサイクルバンク

13年の取り組み



会長 ● 浅沼和子

栃木県足利市は、県の最南端に位置し、日本最古の学校、足利学校のあるまちとして知られている。

まちのほぼ中心に渡良瀬川が流れ、市内は南北に隔たっているが、そのことが逆に足利市の大きな特徴となっている。市の中心部では、渡良瀬川から五分ほど歩いた所に織姫山があり、その緑の中に朱塗りの織姫神社がひと際、引き立って見える。

このように、足利市は豊かな自然環境に恵まれている。この中で、昭和四十七年、消費生活モニター修了生の有志が消費者問題に取り組み団体として「足利市くらしの会」をスタートさせた。

取り組みのきっかけは消費者調査で知った事実

制服リサイクルバンク取り組みのきっかけは、設立以来、毎年実施し

ている消費者問題実態アンケート調査の結果である。

平成七年に「廃棄物の消費者行動について」をテーマに、市民五百人を対象にアンケートした際、「不要になった衣類はどうしているか?」との質問に対し「ごみとして廃棄している」との回答が四六%と、想像以上にあった。特に、学生服に対しては、一部を除き大部分が燃えるごみとして廃棄している現状を把握したのが、すべての始まりだった。

平成八年当時、仙台市消費者協会では制服リサイクルバンクをすでに運営している、との情報を得て、先進地視察を実施し、多くの知識とご指導をいただき、「足利市制服リサイクルバンク」を仮オープンした。

制服リサイクルバンクとは「資源の有効活用と物を大切にする精神か



制服リサイクルバンクの様子

ら、卒業や成長などで着られなくなった学生服や体育着、柔道着などを譲る人から、譲って欲しい人に橋渡しをする場所」として、平成九年七月、現在地に常設オープンした。

「限りある資源を次世代に引き継ぐことは私たちの大切な使命」をモットーに、制服リサイクルバンクは開設以来十三年目となる。

制服の利用、提供いずれの場合もごみ減量と資源の有効活用に貢献していることになる。

市民の善意、会員の協力、行政の支援が実を結ぶ

制服バンクを利用する条件として必ず守っていることは、入学や通学する学校の制服として使用する場合

に限ること。足利市内に在住しているか、市外の学生の場合には市内の学校に進学するか、通学しているか、の条件が付く。

制服の提供は無償とし、さらに提供する制服は、協力していただく方に直接バンクまで搬入していただくが、不満の声を聞いたことはない。

学生時代の思い出がたくさん詰まった大切な制服。これが資源となり、後輩に引き継がれていくことは制服を提供してくれる人も、それを利用する人も、お互いが「見えない糸」でつながっている、と思えてならない。

制服バンクを理解してくれる市民の善意と、会員の協力と、足利市消費生活センターの支援との三位一体の協働が今回の受賞となり、新たな活力源を吹き込まれたとの思いでいっぱいである。

くらしの会設立以来三十七年、社会情勢は変化しても生活に密着したさまざまな問題は大きく変化しているとは思えず、地道な努力を続けることが目標となっている。

制服バンクの運営は、会員のエネルギー源でもあり、歳を重ねるごとにますます元気で魅力的となる姿に、これからも地道に歩み続けたいとの思いを新たにしている。

駅でつながぎ・活かし・広げる 人のご縁づくり



代表 ● 阿奈正子

「まちの駅」の活動をご存知だろうか。「街角の案内所」「地域の茶飲み場」といえばイメージしやすいだろう。図表にある機能とアイテムをそろえれば、誰でもどこにでも設置できる。地域を愛する人びとが自主的に取り組み、現在、全国で千六百カ所を超える。

「おもてなしの心」が
ゆるやかに連携

「本庄にもまちの駅をつくらう」

まちの駅の機能

休憩

誰でもトイレが利用でき、無料で休憩できる

案内

「まちの案内人」が地域の情報を丁寧に教える

交流

地域の人と来訪者の出会いと交流をサポートする

連携

駅をネットワーク化し、もてなしの地域づくりをめざす

まちの駅の必須アイテム



まちの駅看板



まちの案内人
常駐、兼務可



トイレ
休憩場所



地域の
情報提供



「まちの駅」でくつろぐ

と思いついたのは、平成十六年のことだ。行政関係者や市民活動のキーパーソンたちに、何度も相談を持ちかけ、彼らと栃木県那珂川町・馬頭地区のまちの駅を視察したのは、平成十七年だった。

栃木県の北東部、茨城県との県境にある馬頭地区では、個人商店から温泉旅館、窯元、神社、仏閣、美術館と多彩な顔ぶれで、ネットワーク

型のまちの駅が取り組まれている。個性と温かい「おもてなしの心」がゆるやかに連携し、住民主体のまちづくりが進められていた。

ネットワーク型のまちの駅とは、公・民、大・小、さまざまな施設が仲間として、共通の情報発信やおもてなしを行う活動である。「気軽にトイレの使える案内所がたくさんあったら便利だろう」との思いから、平成十三年、福岡県甘木朝倉地域で取り組みが開始された。

ネットワーク型のメリットは、「出会い」と「ご縁」ができること。甘木朝倉地域では、ビール工場から郷土菓子屋まで、駅同士の連携が図られることで来訪者の滞在時間が延び、駅長同士の連携強化と、まちづくりリーダーの育成にも一役買っている。

共助の心のネットワークで 地域を元気に！

馬頭地区の視察から一年後、本庄市は三十一駅でスタートした。

公募で仲間を増やし、現在、公民の五十施設がまちの駅として活動している。各駅では、自分のできる範囲で来訪者を「おもてなしの心」で迎えている。

五十駅共通の活動としては、マップの作成・配布、地域イベントへの

協力などだ。最近では、障害者用トイレ、道路の段差、ポスト、AED設置箇所、バス停などをまとめた「お役立ちマップ」も作成し、利用者から好評を得ている。

月一回開催される「駅長会議」の場を通じて、異業種交流が生まれ、普段から気軽に相談でき、お互いの商売にも好影響をもたらす関係が生まれてきている。

「親戚づきあい」に似た 関係が各地に広がる

本庄を視察した人たちが、自分の地域に合ったやり方で新しくまちの駅を始めている。

岐阜県笠松町では、昨年十一月にネットワーク型まちの駅が誕生した。平成二十年に本庄を視察し、触発された人たちが「笠松でもまちの駅をやるまい（やりましょう！）」と、有志の準備会を発足させた。

二年かけて準備した結果、誕生したのが、「サンキューステーション」（三十九駅をもじっている）だ。

「おかげさま」という共助の心が大切な「出会い」を生み、ご縁を結ぶ。そのご縁はバクテリアのようにどんどん広がるから、面白い。

まちの駅によって「親戚づきあい」のような関係が全国各地に広がっている。

常盤平団地自治会

支え合いつ団地づくりへの努力

孤独死から学んで生かす

「白骨遺体で三年間」「こたつに伏せて四ヵ月」。このような痛ましい孤独死に遭遇し、団地住民は大きなショックを受けた。

なぜ、こんなことに。自治会にとって、この二つの出来事が孤独死の問題に取り組む大きな契機となったことはいうまでもない。団地自治



会長 ● 中沢卓実

会と団地社会福祉協議会（団地社協）が役員会等を開いて、孤独死を防ぐ対策に次々と挑むことになった。

手始めに「部屋の様子がおかしい」「新聞やチラシがたまっている」「電気がつけっぱなし」などの異変に気がついたら「早く連絡してもらおう」ことを住民に呼び掛けた。

この連絡システムを「孤独死一〇番」と位置づけた。全戸配布の自

治会会報『ときわだ

いら』で繰り返し広

報に努める一方、住

民と直接話し合う

「第一回孤独死を考

えるシンポジウム」

を開催（平成十四年

十二月）し、事の重

大性を団地住民に訴

えた。シンポジウム



孤独死対策について厚生労働大臣に陳情（平成十八年8月13日）



「孤独死ゼロ作戦の取り組み」について報告

はその後、毎年一回開催し、平成二十一年で八回目を迎えた。

二十一年十月、団地自治会は「孤独死は団地に限らず、戸建て住宅地の市内でも内在しているのではないか」と考え、松戸市に対して「孤独死の実態調査」を要請。これを受けて、市は二つの警察署に協力を求め、公表した。

市内の孤独死発生状況は平成十五年九十人。年々増加傾向をたどり、六年後の平成二十年には百十一人に増えていた。そのデータによると、三つの特徴が浮き彫りになった。第一は「男性（約七〇％）に多く、女性が少ない」。第二は「戸建て住宅の多い旧市内に多く発生」。第三は「中年の孤独死が三割強」（ここにスポットを当てNHKが「団地の一室で」と題する一時間番組をテレビ放映）だった。

打ち出された孤独死対策

自治会、団地社協、民生委員を、地域をささえる三本柱と位置づけ、孤独死対策に必要な手を次々に打った。講じた対策は次の通りだ。

一、孤独死を考えるシンポジウムを毎年開催。

二、常盤平団地「孤独死ゼロ作戦」をつくり、地域ぐるみで推進。

三、まつど孤独死予防センターを開設、独自の相談業務を開始。

四、「孤独死一〇番」のほか、新聞販売店、カギ専門店と協定書を結び、あんしん登録カードの提出を呼び掛け、身寄りのない孤独死のゴミ処理協定を結ぶ。

五、厚生労働大臣に孤独死対策を陳情（平成十六年一月、平成十七年八月の二回）。

六、常盤平団地「あいさつ推進標語」を作成（平成十七年六月）。

七、常盤平団地「いきいきサロン」を開設（平成十八年四月十五日）二年間の利用者延べ三万四千八百九十三人。団体見学六十団体に及ぶ。

八、「孤独死ゼロ作戦の取り組み」をテーマに「中沢講演」の開催（平成十七年一月から平成二十一年末まで七十回に及ぶ）。

九、常盤平団地「地域の合い言葉」を発表（平成二十年）。

十、この間、冊子「孤独死ゼロ作戦に挑む」四冊、冊子「いきいきサロン二年目のまとめ」を発刊。

その他、自治会会報『ときわだいら』（タブロイド判四ページ、月一回、四十六年間、継続して発行）。

《教訓》人の死をムダにしない。死は生の力ガミを知る。必要な手を打つ。

小平市グリーンロード推進協議会

武蔵野の面影残す

散歩道の魅力づくり



会長 ● 後藤 亘

小平市は、東京都の多摩地域にある市で、都心から約二十六キロのところに位置する。昭和三十七年（一九六二年）に市制を施行し、間もなく五十周年を迎える人口約十八万人のベッドタウンである。

わが市には著名な観光名所、商業集積地などがないため、小さな魅力を集め重ね、いろいろな表情のあるまち、小さいけれどもキラリと光るまちを目指し、まちの魅力の掘り起こしやイベントを行っている。

市を一周できる緑道を舞台に

「小平グリーンロード」は玉川上水、野火止用水、狭山・境緑道を結ぶ緑道の総称で、小平市域をほぼ一周できる水と緑の散歩道として市民に親しまれている。

大きな観光スポットのない小平市

では、この貴重な資源をまちづくり、産業活性化、観光などに活用し、まちを盛り上げていこうと様々な取り組みを行っている。この活動の主体となっているのが、小平市グリーンロード推進協議会である。

この協議会は平成十年度に市民、農業者、商業者、自治会、青年会議所、鉄道事業者、市民などが参加してスタートし、立場の違う様々な人たちが協力しながらイベントや魅力づくりを行っている。

推進協議会では、小平グリーンロードを観光スポットとして育て、多くの方に訪れていただけるよう次の三つの事業を柱に活動している。

「イベント事業」

小平グリーンロードは、武蔵野の風情を色濃く残す、水と緑の散歩道として市民に親しまれてきた。ここ

に人々が訪れるきっかけづくりとして、この散歩道を舞台に様々なイベントを開催している。（花まつり、ガーデニングコンテスト、灯りまつり、小平グリーンロードウォーク、収穫祭など）

「魅力づくり事業」

東京近郊で身近な自然に触れられる場として、多くの方が訪れているが、さらなる魅力づくりとして、野草保護活動や公園等の花壇整備活動、地元ゆかりの芸術家の彫刻を設置するなどの活動を行っている。

「広報PR事業」

小平グリーンロードの魅力を伝える多くの人に訪れていただけるよう、HPの開設やパンフレットの制作など広報活動を行っている。

市民が支える地域づくり継続

推進協議会は、部会を設けて、そ



市民による花壇の植え替え



ブロンズ像の手入れもボランティアが…

それぞれの部会が主体的に活動し、魅力づくり、来訪者のおもてなしを行っている。日常活動には、市民がボランティアで参加し、まちづくりを支えている。例えば、

▽玉川上水自生野草を守り育てる会▽あじさい公園ボランティア部会▽齊藤素巖グリーンロード美術館部会▽狭山・境緑道花街道ボランティア部会▽小平グリーンロードイベント部会、などである。

行政ではなかなか目の行き届かないところでも市民の視点で活動し、多くの方に喜ばれている。また、主体的に地域に関わることができると「自己実現の場」として参加する方にも満足感がある。

グリーンロード推進協議会は昨年、設立十周年を迎えた。この間、多くの方々の努力、継続した取り組みが今回の受賞につながったと感じ

ている。この受賞を推進力として、さらなる魅力づくりに取り組み、住んでよかったまち、訪れたいまち、誇りを持てるまち、そんな小平のまちづくりを目指していきたい。

かつての違法風俗街を アートで再生する

NPO黄金町エリアマネジメントセンター

横浜市中区黄金町（初音町と日ノ出町の一部を含む）一帯は、終戦直後から売買取春と麻薬の街として広く知られていた。最盛時には女性が店頭に立って客引きする違法な小規模店舗が約二百五十軒あったといわれている。

現在、警察の一斉摘発によって違法行為は終息し、その後も警察による二十四時間警備が続いている。街の風景にはまだ当時の名残りがあが、そこにアーティストのスタジオや新しい店舗が少しずつ進出して、以前とは異なる人の動きが見られるようになった。

売買取春撲滅の声は地域の住民から上がった。違法な小規模店舗はいつの間にか周辺の住宅や普通の店舗を営むエリアまで拡大し、多くの人たちが転居を余儀なくされるという危

機的な状況を招いていた。

そこで、当時の初黄町内会と日ノ出町町内会を中心的作用を果たしていた人たちが地域の環境浄化のために連携し、動き始めた。

その活動はやがて大きなうねりとなって行政や警察を巻き込み、二〇〇五年のバイバイ作戦（警察による違法風俗店の一斉取り締まり）を実施するまでに至った。



地域のマスタープラン作成のワークショップ



鉄道高架下を活用したアートの拠点

この初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会を中心に、神奈川県警察本部など警察関係組織や、横浜市中区役所、都市整備局、創造都市事業本部などの行政組織、横浜市立大学をはじめとする複数の大学、地元小学校のPTAなどが連携し、全国にも例を見ない活動を展開している。

空き家となった店舗群は まちづくり拠点に

バイバイ作戦以降、違法営業はなくなったが、約二百五十もの小規模店舗が空き家となつて残るという課題が生まれた。この課題に対し、小規模店舗群をまちのリソースとして捉え直すことで、大規模な再開発に頼らないコンバージョン型のまちづくりを推進する方向性が選択された。

そして、それらの小規模店舗群を地域再生に資するプログラムを実行できる空間へとコンバージョンすること、アーティストのスタジオやショップ・カフェなどの機能を導入し、まちの再生を図っている。また、当該地

域を走る京浜急行の高架下にはアーティストのための貸しスタジオや、カフェ・ショップ機能が導入された文化芸術スタジオが二棟建設され、アートによるまちづくりのための拠点として活用されている。

昨年四月、協議会事務局の役割を担うNPO法人黄金町エリアマネジメントセンターが発足。今年一月現在、アーティストや建築家、ショップやカフェなど計十七組が、NPOが管理運営する貸しスタジオを拠点としている。

まちづくり運動の趣旨に賛同し、この街での活動を開始した彼らは、個人の制作活動の他にも、誰もが参加できるワークショップの開催や地域イベントへの参加を通して、地域との交流を深めている。

売買取春が行われていた当時、地域住民が立ち入ることのなかったエリアとのつながりが形成され、新たな街の参加者である彼らとの技術や意見の交換を通して、街の将来像が緩やかなペースではあるが着実に形作られ始めている。

また、毎年秋開催のアートの祭典「黄金町バザール」は、アーティストとともに国内外からの来訪者に地域の取り組みを紹介する機会となっている。

学生との連携によるうるしの里活性化実行委員会

ものづくりの協働作業で 強めた住民と学生の絆



京都精華大学建築学科准教授

● 片木孝治

活動の舞台、福井県鯖江市河和田地区（うるしの里）は、県のほぼ中央部に位置する越前漆器の産地である。二〇〇四年七月の「福井豪雨」により、地区は甚大な被害を受けた。災害復興活動を進める中で、京都から支援に来た数名の若手ボランティアと、地元で環境活動をしているNPO法人かわだ夢グリーンとの出会いが、京都の学生と河和田地区との交流の始まりである。

人と人との絆が導いたこの活動は、京都で芸術や文化を学ぶ京都精華大学を中心に、地元の福井大学など、有志の学生（総勢百八十名程度）と地区民とで実行委員会を構成する。水害という負の局面を乗り越えて、現代社会が抱える問題（人口格差や一次産業・伝統産業の沈滞など）を、河和田地区に照らし合せながら、

地域発展の新しい道を目指している。

活動の中核を成しているのが、河和田アートキャンプ事業である。年間を通して学生たちとの交流（地域の祭事・農林作業の学生参加など）は、この事業を通して育まれた地区民と学生たちの親睦関係が基盤となる。

夏休みは古民家を拠点に 共同生活

学生たちは七月末～九月初めの約一カ月間（夏休み）に、地区の空き家となった古民家を「生活の拠点」として活用し、ものづくりの共同合



やしきを楽しむ学生たち

宿を行う。

学生たちは「芸術が社会に貢献できることとは何か？」をテーマに、大学で学んだ「芸術」の観点から地域生活を見つめ直し、この地域でしか発想し得ない創作活動に挑んでいる。それは作品を展示し鑑賞してもらう観光資源目的のアートプロジェクトとは少し異なる側面を持つ。

会期には展示やツーリズムも盛況となり、内外からの来訪も年々増加しているが、活動の特徴は、学生たちと地区民とを「人の絆」形成まで結びつける過程にある。作品（ものづくり）は学生たちと地区民の協働で進める。

企画は、地区固有の生活を「家族」から導き、農業・林業・伝統産業Ⅱお父さん。食育Ⅱお母さん。学習Ⅱ子供たち。健康Ⅱご老人、と大雑把ではあるが、六つのパート「農業とアート：健康とアート」に分かれる。



学生の弟子入り風景

学生たちは、各々の創作活動を通して「家族」と対話し、地区の日常生活で積み上げられた「知恵

や技」を学びながら、地区の生活に若い感性を注ぐ。

「ものづくり」という共通の目的を介して一カ月間を地区で生活するこの活動は、一過性の体験ではなく、人の結びつきを育みながら経験として「知恵や技」と「感性」が交換される。地区にとって若く斬新な刺激は活力となり、学生たちにとっては都会で「無関心」に過ごしていた日常生活に気付きを与える。

卒業後、地域に移り住む 学生も

活動を始めて六年。当初参加した学生たちは、立派に社会人となり「自分の仕事を何か河和田に関り役立てたい」と語る。昨年卒業した学生は、三年間の参加を経て河和田に移り住み、地域のために働いている。

また、毎年参加を続ける在学生からは「自分たちの食べるお米は自分たちで育てよう」「河和田の人と仲良くなったので、お祭りへ参加に行きます」などの声も聞かれ、意欲的な地域参加も拡大している。

ものづくりの里に集う、ものづくりの学生たち。顔と顔がはっきり見えた絆の中で、「学生との連携」が地区にとって「未来との連携」であることを願いつつ、活動の継続に尽力したいと考えている。

種蔵を守り育む会

岐阜県飛騨市

協働で守る集落の歴史・文化



会長 ● 澤 正躬

宮川町種蔵地区は、岐阜県の最北端飛騨市の富山県境に位置する。石積みの棚田と点在する板倉や古民家が織りなす日本の原風景ともいえる美しい山里景観の中に、十二戸二十四人が暮らしている。

過疎化と高齢化（高齢化率七〇・八％）の急速な進展により、このままでは近い将来、農作業はもちろん、共同体の維持すら困難な状況になることが危惧される「限界集落」で、飛騨市内にあっても、最も存続が危ぶまれる集落の一つである。

定住人口の確保への取り組み

何百年も種蔵地区に受け継がれてきた集落独自の貴重な歴史や文化、棚田・板倉などの景観を次世代に守り伝えていく。そのためには、地域の住民のみならず、周辺地区の住民



春木棚の作業に取り組む

や、各種団体などのさまざまな主体が「種蔵を守り育む」という理念を共有しながら、一体となって集落環境を保全する仕組みづくりと、将来にわたって地域を維持していくための定住人口の確保に向けた取り組みが望まれた。



突き屋棟上げ

市では、棚田・板倉の景観資源を保全活用し、適度な交流人口を招き入れ、集落の持続を目指す「種蔵地区整備基本計画」を策定し、古民家を活用した山里の暮らし体験施設「板倉の宿 種蔵」の整備を進めていた。

このような中で、平成十八年に種蔵地区や周辺地域の住民十一人が集まって「種蔵を守り育む会」を立ち上げた。

オブザーバーに市職員、アドバイザーに移住者や体験学習の指導者を位置づけ、さまざまな意見を取り入れて、他のボランティア団体とも協働しながら、地域活性化イベントや景観保全作業などのまちづくり活動を進める会である。

地域の高齢化が進み、管理できなくなった荒地などの草刈り作業を各種団体に呼びかけ実施している。また、昨年四月に営業開始した「板倉の宿 種蔵」の運営組織と連携し、都市住民など来訪者の体験交流事業への協力を行っている。

地域のお年寄りが元気になった

平成十八年秋、種蔵地区及び各種団体に呼びかけ、第一回「飛騨種蔵新そばまつり」を企画した。

それ以降、実行委員会が毎年開催し、地元農産物の販売やバザーなど地元住民参加型のイベントとして定着、市内外はじめ県外からも毎年、大勢の方が訪れている。

会員はじめ多くのボランティアの協力による景観保全作業や地域を訪れる方々との語らいにより、地域のお年寄りが元気になったという喜びの声が聞かれるようになった。

同じ問題を抱える集落は幾つもある。元気づくりのモデルとなるような集落の暮らしを尊重しながら、景観を損なうようなことなく、雑木・植林・雑草などで覆い隠されている石垣の棚田の再生、炭焼き窯の復元、特産品の開発など、地域の身の丈に合った活動を続けていきたい。

あかばね塾

絶滅の恐れあるウミガメを
住民参加で保護活動

代表 ● 金原康朗

ネットワークが塾の財産

あかばね塾が活動の拠点とする田原市は、愛知県の南東部渥美半島のほぼ全域を市域とし、農業、工業が盛んな町で、伊良湖岬や片浜十三里など自然にも恵まれている。

太平洋に面した中央部には毎年、サーフィンの世界大会が開催される赤羽根海岸がある。この美しい砂浜と毎年産卵に訪れるアカウミガメを守ろうと活動をしているのが、あかばね塾である。

塾の発足は平成三年に遡る。当時の赤羽根町が「ふるさと創生一億円」を活用した事業を推進する一つの施策として誕生したのがきっかけだ。「元氣な人間が集まって面白く楽しいマサツを起す」を目的に掲げ、地域づくりに関心のある住民が塾活動に参加し、まちがそれを支援する形で活動が進められてきた。

視野を広げるために外部から第一線で活躍する方を講師に招き、講話、意見交換を通して、知見を深め活動に活かすことから活動が始まった。

現在でも交流を持った講師には案内を出して「夜鍋の討論会」と称した夜を徹して語り合う会を毎年開催している。こうして得たネットワー

クはあかばね塾の財産となっている。

発足二年目から取り組んでいるのがウミガメの調査保護活動である。環境問題を主に取り組組



ウミガメのふ化調査



サーフィン大会も開かれる赤羽根海岸

みたいという意見が塾生から出され、ゴミをエサと間違えて死亡する例があるウミガメについて調査を始めることにした。いざ、海岸へ出てみると、砂浜にはゴミが散乱し四輪駆動車が縦横無尽に走り回っている。

海岸のゴミ拾い、次に車の進入を防ぐために看板を手作りで製作。遂には地域の了解を取り付けて海岸への車止めを設置した。

毎朝、海岸を歩いて上陸調査する塾生を見て、地域の人たちは「おかしな奴らだ」という見方から、しばらくすると「海岸清掃くらいは手伝えるぞ」に変化した。ウミガメマジックなのか？以降ウミガメを軸に、さまざまな団体や個人とネットワークが広がり築かれてきた。

平成五年から実施している「エコオリエンテーリングin赤羽根」は八

月の炎天下の中で海岸清掃をするハードなイベントである。終了後に実施する子ガメの放流会（水族館で人工ふ化したもの）の効果もあって、毎年県外からも参加者がある。

今秋には田原市で
日本ウミガメ会議を開催

海が荒れるたびに打ち上がるゴミは拾っても拾ってもきりがなく、ウミガメの産卵に支障を及ぼす。クリーンアップ全国事務局が推進する国際ビーチクリーンアップは、漂着ごみの種類や量を世界で一斉に調査することで、ごみの発生源を突き止め改善しようとするものだ。

また、(財)環日本海環境協力センターが呼びかける同様の調査も、継続的に実施・報告を行っている。漂着ごみの根絶に少なくとも貢献できていると思われる。

今年で十八年目になるウミガメの調査結果は、日本ウミガメ協議会にも報告している。日本全体のデータを集計分析することにより、絶滅が危惧されているウミガメの保護活動に役立っている。

今年はこの協議会の研究発表の場である日本ウミガメ会議をあかばね塾が受け持ち、十一月下旬に田原市で開催する。興味のある方はぜひご参加ください。

いづべUD広場（いづべユニバーサルデザイン推進会議）

震災復興を経て始まった

UD活動によるまちづくり



こうべUD広場座長 ● 田中直人

神戸は港を中心に栄えた国際都市として、「異国情緒あふれる個人的なまち」というイメージがあると言われる。いろんな文化を受け入れ、常に先取りの姿勢にあふれたこのまちが好きな人も多い。

山から海にわたる都市開発とともに、福祉のまちづくりにおいても、全国に先駆けて、一九七七年「神戸市民の福祉をまもる条例」を制定するなど、積極的にバリアフリー整備を展開してきた。

震災からいづべUD広場の発足へ

一九九五年一月十七日の早朝、突然の阪神・淡路大震災でこのまちの歴史は変わった。これまでのまちづくりを根底から揺り動かし、生命や安全ということをすべての人に強く問いかけることになった。

震災を機に年齢、性別、文化、身体状況などの違いを超え、みんなが助け合い、人と人とのつながりの大切さが実感された。

復興のまちづくりの中で、市民を中心とした「ユニバーサルデザイン（UD）」すべての人に使いやすいものや環境などのデザインを目ざす概念「の考え方を実際の動きで展開し、神戸を世界一ユニバーサルなまちにしていこう——そんな筆者らの呼びかけで、二〇〇三年五月、こうべUD広場（こうべユニバーサルデザイン推進会議）が発足した。

こうべUD広場では、これまでの「手助けする側」と「される側」という固定的な考え方や、「する側」から「される側」という一方通行的な考え方とともに、仕組みや制度などを見直し、すべての人が社会の一

員として役割を持ち、持てる力を発揮し、支え合う「ユニバーサル社会」の実現をめざすため、ともにUDの普及・推進に取り組んでいくUDサポーター制度を導入した。

この制度を拡大しながら、さまざまなユニバーサル・プロジェクトに取り組んでいる。UDサポーターは二〇〇九年十二月現在、千七百三十七人に達する。

まちづくりと連動したUD活動

UDの推進という視点から、広く市民に参加を呼びかけ、基本的な考え方を「呼びかけ文」としてまとめた。今日に至るまで、約七年間、毎月の例会や年一回のUDフェアの開催、連続講座やUD大学におけるまちづくり学習などを継続している。

特に二〇〇五年八月には、全国から二千七百人が参加し神戸で開催された第三回ユニバーサルデザイン全国大会において、メンバーが中心となり企画・運営の役割を果たした。

また車いす使用者、視覚障害者や市内地域の活動家も参加し、神戸空港や神戸しあわせの村、新中央市民病院などのUD検証を通じて、市内各地でのまちづくりと連

動したUD活動や具体的なプロジェクトのUDにも貢献している。

学びの面からも、小学校への出前授業などのプログラムづくりから、UDサポーターが講師を務めるなど、教えられる立場だけでなく、教える立場からもUDを考える機会を作っている。またワークショップなど多角的に行い、楽しみながらお互いの気づきの場面を生み出し、できることから実現を図るプロジェクトを展開している。

これらのUDに関するまちづくりの取り組みについて、全国各地からの視察なども多いが、今後もUDによるまちづくりの先駆的モデルとして発信し、その輪を広げていきたい。



こうべUD大学（こうべUD広場主催）におけるまちづくり学習の様子

自分らしい働き方

「私おこし」で地域も元気に！

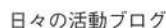


二時間で五百円の講座だから「ワ
ンコイン講座」。テープ起こしやデー
タ入力など、主婦に人気があった技
術系講座だけでなく、ビーズづくり
や親子パソコン教室など、何でも講

そして、受講者は主婦からSOHO事業者へと起業したり、四十歳代で企業に正社員採用されるなど、雇用状況の厳しい高知で、自分らしい働き方を実現させていった。

二〇〇六年ころ、高知県では

この経験は、メンバー各々の成長にとって貴重なプロセスとなった。部分的な下請け作業を行うのではなく、行政改革の一端を自ら工夫して担うという体験が、「私おこし」の



このことは、時間や場所に制約がある人びと、すなわち子育て中の主婦や障がい者、そして日中、自由な時間が取れない会社員や教員など、多様な環境下にある人びとが、さまざまな枠を超えて地域活動に参加できることを証明している。さまざまなかたが集まれば、知恵が掛け合わさり、必ず化学反応が起きる。

今、私たちの周りでは、教育をきつかけに集まった人びとが、地域を越えていろいろな商品を生み出したリ、コンテンツを制作したりしている。「出来る、出来ない」を環境のせいや他人任せにするのではなく、今、自分がやることをやる。

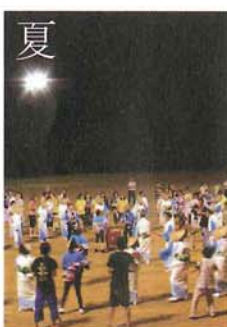
一つ一つは小さな経済活動だが、「私おこし」は、地域に元気をフツフツと生み出してやまない。



常盤平団地自治会

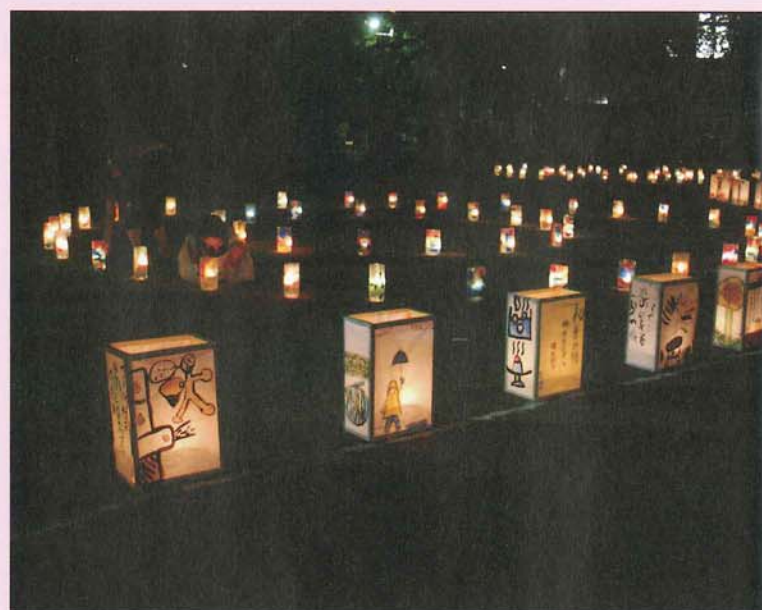
● 千葉県松戸市 (p15)

団地内の交流の場「いきいきサロン」が孤独死を防ぐ一助に



学生との連携によるうるしの里活性化実行委員会

● 福井県鯖江市 (p18) 春夏秋冬のさまざまな活動



小平市グリーンロード推進協議会 ● 東京都小平市 (p16)

散歩道を舞台に行われる「灯りまつり」



初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会 ● 神奈川県横浜市 (p17)

毎月 27 日に行われている防犯パトロール

平成21年度 地域づくり総務大臣表彰



あかばね塾

● 愛知県田原市 (p20)

中学生の協力による漂着物調査 (上)
ウミガメの産卵を見守る (下)



種蔵を守り育む会 ● 岐阜県飛騨市 (p19)

第4回「飛騨種蔵新そばまつり」には県外からも大勢の人が訪れる



NPO 法人とさはちきんねっと ● 高知県高知市 (p22)

受講者にも好評な「ワンコイン講座」には多くの講座が…



こうべUD広場 (こうべユニバーサルデザイン推進会議)

● 兵庫県神戸市 (p21)

こうべUD大学における地域の魅力発見まちあるきの様子



子ども夜市実行委員会 ● 福岡県飯塚市 (p27)

アーケード内で開催された「子ども夜市」のにぎわい (左)「子ども夜市」のはんてん姿の子どもたち (右)



山鹿温泉観光協会 ● 熊本県山鹿市 (p29) 八千代座での山鹿太鼓の実演



大隅の國やっちく松山藩 ● 鹿児島県志布志市 (p30)
高さ 18 尺、幅 27 尺におよぶ幻の一夜城「松山城」



福井県小浜市 ● 福井県小浜市 (p32) キッズキッチン (かまど)



B級グルメの聖地久留米実行委員会
● 福岡県久留米市 (p28) 「B級グルメの聖地」を宣言



東京都江戸川区 ● 東京都江戸川区 (p31)
ボランティアによる工作教室の模様



愛媛県東温市

● 愛媛県東温市 (p34)
エコ・キッズフェスティバル (上) 体験を通じて環境問題を学ぶ (下)



兵庫県 ● 兵庫県 (p33)

「1.17は忘れない」 ひょうご安全の日のつどい
(平成 22 年 1 月 17 日 人と防災未来センター周辺)
メモリアルウォークや防災訓練など多彩な行事を毎年 1 月 17 日に開催



渋谷秀逸氏 ● 長野県阿智村 (p36) 花桃まつりのにぎわい



村上龍男氏 ● 山形県鶴岡市 (p35)

展示種類数世界一のクラゲ展示



梶 誠氏 ● 愛知県豊田市 (p37)

都市から移住した家族の子どもたちの通学風景

子ども夜市実行委員会

福岡県飯塚市

子どもの自主的体験活動が まちを元気に



第十五回子ども夜市実行委員長
(飯塚市立筑穂中学校二年)

● 古市佳乃

福岡県の県中央にある飯塚市。石炭の生産地として日本の近代化を支えてきた歴史をもつ。「子ども夜市」

は、そんな飯塚市の中心商店街の一つ、ほんまち商店街で毎年七月最後の土曜日に、夏の土曜夜市の目玉として開催している。

子ども夜市は、幼児から十八歳までの子どもの参加者が、商店街アーケード内に手作りのお店を出し、実際のお金を使って売り買いする。子どもたちは、大人に頼らずに自分たちで出店を申し込み、お店の仲間と一緒に考えて商品を作る。出店から決算報告までのさまざまな課題を自らの手で行っていく。

子ども夜市の始まりは、NPO法人「こどもと文化のひろば わいわいキッズいづか」の青年と小学校四年生・中高生の体験活動として、



小学1年生の小物屋さん「いらっしやいませ〜」



男の子の店「だんご屋むさし」

一九九三年、子ども店を行ったのがきっかけだ。九五年に「第一回子ども夜市」が開かれた。

飯塚市の夏の風物詩に

当時、商店街のアーケード内で開催を考えたが、商店街の合意を得られず、商店街の駐車場を借りる予定だった。開催当日、雨の予報が出たため、急ぎよ商店街アーケード内で

開催された。結果は、沢山のお客が集まり、近年にない人出となり、その後、土曜夜市の一環としてアーケード内で継続されることになった。

商店街の方々や子どもの保護者によつては「子ども夜市」を見守る目にも温度差があったが、台風・水害・火災などで商店街が被害に遭う中で開催した時でも、一千人近い人出で賑ったことから、「子ども夜市」に対する認識が少しずつ変わり、今では夏の風物詩となっている。

お店は、手作り小物やペットボトルピンのボーリングなどのゲーム、昆虫やメダカ、カレーやクッキーなどの食品のお店などさまざまで、子どもたちの自由な発想と努力が光っている。

子ども夜市の企画・運営は、小学六年生から中学生の子ども実行委員会である連長会(子ども店連合会長会)

を中心に、子どもと大人で実行委員会を組み、出店募集のチラシから説明会、当日の運営、まとめ会などまで、連長会が中心となり進める。会議の準備など大変なことが多い

が、集団で困難を乗り越える喜びがある。説明会の中で商店街の本物の「店長さん」から商売の心得を伝授してもらうのも特色の一つだ。

売上金の一部は チャリティ活動にも

二〇〇二年からは、子ども店より出し合った売り上げの一部をチャリティする活動も始まった。

きっかけは連長会での企画会議の時、テレビや新聞報道で九・一一同時多発テロやアフガニスタン侵攻の様子を目にした子どもたちから、「私たちだけがこんなに楽しんだりしていいの？」「自分たちと同じ年の子やそれより小さい子が、なぜ死んだり傷ついたりしなければいけないの？」「楽しんで稼いだお金を困っている子どものために使いたい！」などの意見が出たことだ。

それ以降、①子どものために使われる②経済的支援が必要など③何のために使われるか使途が自分たちにはわからなく——などを基準にして、乳児院や心臓移植が必要な子どものもとに連長会がお金を直接届けている。

「子ども夜市」は、子どもの自主的な体験活動の場がまちを元気にし、チャリティ活動が身の回りや社会に対する目を育てている。

B級グルメの聖地^{まち}久留米実行委員会

福岡県久留米市

「ご当地グルメ」で

まちの活力取り戻す



実行委員長

橋本安彦

久留米市は平成十七年二月の広域合併により、豊かな自然と文化芸術、そして食文化など、多様な地域資源を持つ都市となった。

翌十八年に策定された「久留米市観光コンベンション振興基本計画」では、久留米を「訪れたい」久留米に「住んでみたい」といった「まち」に育てていきたい、というビジョンが掲げられている。

一方、国も「観光立国」を目指すデジタルジャパン・キャンペーンや地域資源を活用した「地域ブランドによる地域振興」など、様々な施策を打ち出している。そして、今日、多くの地域で「ご当地グルメ」を題材に「まちを元気にしよう!」という活動が盛んに行われている。

「日本中が注目するB級グルメ都市久留米!」。私たちのふるさと久

留米は、多くの人々のためまぬ努力と情熱で「元祖とんこつラーメン」「やきとり日本一」そして「筑後うどん」が「三味一体」となった、まちおこしを展開してきた。

地域ブランドを確立、経済効果も

食を通じた官民一体の取り組みは、単なる一過性のイベントではなく、地域の食文化やブランドの確立と目に見える経済効果を生み出すことが期待できる。

久留米でのB級ご当地グルメの取組みは約十年前、地域の危機的状況を機に始まった。



「B級グルメの祭典」B1グランプリの様相



全国のご当地グルメが久留米に集結!

一九九八年、当市の基幹産業の経営破たんにより激しい不況の嵐にさらされた。負のスパイラルに落ち込んだ地域を「何とか元気にせんといかん」と有志たちが集結し、「元祖とんこつラーメン」によるまちおこしを開始(一の矢)

続いて、二〇〇三年、久留米市内に当時、九州最大級のSCが開業。中心市街地が危機的状況を迎える中で、市民と焼き鳥業界がタッグを組んで「やきとり日本一を宣言」(人口当たり日本一焼き鳥店が多い)。以来「日本一のやきとりフェスタ」を中心とした取り組みが続いている(二の矢)

さらには、地域のうどん店が結集し、「筑後うどん振興会」が組織され、「筑後うどん」という共通の地域ブランド創りと「日本三大うどん」の一角となることを目指し始めた(三

の矢)

「B級グルメの聖地^{まち}」を宣言

これら長年にわたる「ご当地グルメ」の取り組みを「三味一体化」する最強の手段として開催したのが、「B級ご当地グルメの祭典! B1グランプリin久留米」である。

十年にわたり展開してきた「B級グルメ」の取り組みという「活性化の種」を多大な集客力を持つ「B1グランプリ」で大きく芽生えさせ、中心市街地で継続的に育んでいくことが当事業の目的である。

B1開催を機に「B級グルメの聖地久留米」を宣言。久留米の食文化を三百六十五日、年間を通じて全国発信する大きな一歩を踏み出した。

「ご当地グルメ」は、誰にでも身近なものであり、話題にこと欠かない題材である。そして、これらの取り組みは人々の生活に潤いを与え、地域ににぎわいと活力を取り戻す大きなエネルギーとなる。

今後も一連の取り組みで生み出されたシナジーを活かし、さらにステップアップさせ、継続的ににぎわい創りと、二〇一一年九州新幹線全線開通に向けた食による地域ブランドの確立を促進させていきたい。

山鹿温泉観光協会

熊本県山鹿市

地域の歴史・伝統資源を
総動員して温泉地を活性化

会長

● 井口圭祐

九州の中央、熊本県北部の山鹿市は夏の山鹿灯籠まつりで知られる温泉地である。かつては豊前街道と菊池川の交通の要衝で、人と物の行き交う場所だった。

江戸時代、九州で三カ所しかなかった「秤座」が置かれ、商人たちはいつしか旦那衆と呼ばれ、力を合わせ民衆をリードしてきた。

代座」は明治四十三年、当時の旦那衆たちが出資者を募り、建てた芝居小屋である。江戸時代の芝居小屋様式を残し、洋風建築の長所を取り入れ、客席の天井には各商店の広告絵があり、中央にシャンデリアが下がるハイカラな建物だ。

しかし、昭和四十年代になると、映画やテレビの普及などで閉鎖され、廃屋同然まで朽ち果てた。旦那

衆の想いを知る老人会は雨

漏りを防ぐた

め「瓦一枚運

動」を展開し、

再び注目を集

めるように

なった。

若い人たち

も保存と活用



今年で百周年を迎えた「八千代座」



山鹿を歩いて楽しめる「米米惣門ツアー」

を模索。平成二年から歌舞伎の坂東玉三郎さんの公演が毎年行われ、平成の大修理を経てやっと当時のにぎわいを取り戻し、町のシンボルとして蘇った。

国の重要文化財でありながら、現役の公共ホールだ。歌舞伎の公演から山鹿小学校の卒業演劇まで、年間約八十の催しがあり、それ以外は見学ができる観光施設でもある。

山鹿灯籠浪漫・百華百彩を
まちぐるみで盛り上げる

「山鹿灯籠浪漫・百華百彩」は八年前、この八千代座と豊前街道を中心に始まった。特産の和傘にスポーツを当て、レトロな町並みに設置する竹とうろうや和傘のオブジェはすべて手作り。十二月に千二百本の孟宗竹をみんなで切り出す作業から始め、製作していく。崇城大学の芸術学部と建築学部の協力で町は幻想的な雰囲気になり、年々規模も拡大、今年も二月の毎週金曜・土曜の計八回開催する。

竹とうろうに使用するろうそくは六千個あまり。夕方から通りは歩行者専用で、毎回、実行委員会と地元町内会や子供会・老人会が点火、暖かいあかりで埋め尽くされる。また八千代座内では、山鹿太鼓の演奏と山鹿灯籠踊りが披露され、暖かい灯

りとともに心を癒してくれる。

この山鹿灯籠浪漫・百華百彩実行委員会は、山鹿温泉観光協会、地元商店街、崇城大学、市・県の職員、八千代座の出演団体、その他有志で構成されている。また、年間を通して山鹿を楽しめる町歩きツアー「米米惣門ツアー」は、山鹿温泉観光協会が受付を担当している。

江戸時代の風情が残る惣門地区は物資の集散地で、今も老舗の酒蔵や味噌蔵、せんべい屋があり、その店主たちが自らガイドをして「米」というテーマで案内する。

始めたきっかけは、十年前ドラマのロケが行われ、改めて地域を見直す中で、「米」という共通点に気付いたことだ。地域を観光に活かそうと店主たちが企画し、今ではほぼ毎日ツアーが行われている。

各店では試飲や試食も楽しめ、最後の光専寺では江戸時代、米問屋で豪商宗方屋が大金を費やして一切経を寺に寄贈した逸話など、愉快な店主たちが約一時間ご案内する。

山鹿温泉をもっと楽しんでもほしい。山鹿の町並みや老舗を回り伝統を感じてほしい。これからも本物を前面に出した観光と、楽しい地域づくりをコーディネートしていきたい。

大隅の國やつちく松山藩

手作りの祭りを

自分たちの手で実現



藩主 ● 吉田隆司

時代は平成を迎え、全国各地にパロディ（遊び心）ミニ独立国なるものが立ち上がり、地域振興（村おこし）を図ろうとするさまざまな取り組みが始まっていた。

その「村おこし戦国時代」の様相を呈していたところ、人口五千人足らずの小さなわがまち松山町（現志布志市松山町）は、決して活気があるとは言えない現状であった。

「村おこし若者会」がまず発足

しかし、数人の若者が自分たちの町も「どげんかせんといかん」と立ち上がり、町内各種団体へ呼び掛け「松山町の未来を語る会」を実施したところ、百五十人以上の「若者・よそ者・馬鹿者」（やる気のある若者・他地域のことに詳しいよそ者・何でもことんまでやる馬鹿者）が参加

し、熱い討論が交わされた。

それぞれの思いが交差し、心が一つになった時「村おこし若者会」が発足。その中から「大隅の國やつちく松山藩」なるものができ上がり、「自分たちの力で手作りの祭りをやって行こう！」と始まった。

この「大隅の國やつちく松山藩」という名前の由来は、「大隅の國」は鹿児島県大隅半島、「やつちく」

は志布志市松山町が農業中心の町であることから、野菜と畜産を意味するほか、鹿児島県の方言で「やつちける・やりとげる」の意味があること、そして「松山藩」は平家の末孫、



秋の陣まつり奉納武者行列



国際青少年音楽祭を通して地元住民との交流を演出

平重盛の築城した松山城（現存せず）の歴史とパロディ心から、つけられたものである。

開藩当初、祭りを中心に進めていたのだが、ただ漠然とやっていたわけではなく「もてなしの心」「人づくり」という二つの大きなテーマをもってすべてのことに当たった。

松山町に足を運んでくれた子供から高齢者まですべての人がいかにすれば楽しんで、たくさんのおい出を持って帰っていただけるのかと「もてなしの心」で接する気持ちを持った地域の若者たち。

さまざまな人材を発掘・育成

イベントを通じて、さまざまな業種の、さまざまな考えの人が集まることにより、それらの人材が発掘され育成されていく。

地域づくりの第一に「人づくり」

を挙げ、さまざまな人材がお互いに知恵を出し、汗を出し合うことをその手法として実践し続けていき、成果を上げることにつなげていく。

県外はもちろん県内においても「松山」という名前を知らない人も多かったが、このような活動を継続していくことにより、知名度が向上し「松山」が「やつちく」の愛称で呼ばれるなど、広く県内外に知れ渡り、地域活性化に大きな効果をもたらすことになった。

また、このように知名度が上がったこと、活動への取り組み姿勢を評価されることが、さらなる飛躍となり、他地域のさまざまなイベントへの友情出演（他地域の方々との人づくり）や国際青少年音楽祭、青少年の海外派遣を含む国際交流事業（青少年健全育成）など、いろいろな活動を行うようになった。

「パロディ（遊び）」も続ければ文化になる。そして、人びとの心に歴史として刻みつけられる。そんな思いで、この地域活性化、人材育成へとつながっている「やつちく魂」を次の世代以降に引き継いでいけるよう努力し、地域の人びとが元気で、町が元気で、「やつちく」を誇りと自信に変え、一層発展することを願いたい。

東京都江戸川区

すすくすくスクール事業で 地域教育力を高める

江戸川区教育委員会事務局教育推進課

江戸川区は東京二十三区の一つで、都の東端にあり、すぐ東に江戸川、西に荒川、南は東京湾と水辺に囲まれた都市である。

人口は約六十七万人。都心へのアクセスも良く、住民は増えており、特に若いファミリー世帯の増加が目立つ。大変活気があり、子育て需要の高い区といえる。

家庭や学校では 学べない体験の場

子どもたちを健全に育てていくには、地域・学校・家庭の三者がしっかりとその役割を果たし、また連携していくことが基本である。

ところが、近年の核家族化の進行、家族のあり方や地域コミュニティ、ライフスタイルの変化、価値観の多様化により、残念ながら三者の役割分担の自覚・連携する力もその機能を弱めている。

そこで江戸川区は、さまざまな活動を通して多くの人と人との触れ合いの場、また家庭や学校では学ぶことのできない体験の場、「人間教育の場」、これをつくろうと考えた。

バランスの良い人間を育て、さらに地域全体で子育てをする雰囲気をつくり、かつての路地裏のような人と人との関わりの中で、豊かな人格を育てていこうとしたのである。その名は「すすくすくスクール」。

平成十五年度に一校でスタートし、十六年度に三十九校、十七年度より区内全七十三校で実施している。

学童クラブを包含する

保護者が就労等により、放課後に子どもを育成することができないという家庭の希望に応じて、実施する学童クラブ（学童保育事業）も包含して実施している。

従来設けていた定員制や受け入れ制限三年生までといった枠は完全に取り外され、福祉、教育といった垣根を超えた新たな健全育成のシステムである。

すすくすスクールでは、学校ごとにサポーターセンターという地域応援団を立ち上げて、この事業を支えている。地域の教育力を最大限に活用するシステムとしてそう呼んでいる。

メンバー構成は多様で、その学校で最も効果のある、また継続して、さらに多様な取り組みにつながる組織を立ち上げている。

地域には「地域の子どもたちのためならば」と言う心意気の人がたくさんいる。そうした思いのある方々と、学校や家庭では経験できないことを、さまざまな知恵を出し合いながら行っていくのである。

やがては地域教育を 支える担い手に成長

例えば、伝統文化、スポーツ、日本古来の風習など、その活動は多岐にわたる。さまざまなメ



異学年交流の促進の場となる公園のブランコ

ニューは子どもたちにとって良い体験の場となるだけではなく、関わる大人たちにとっても、やりがいや生きがいにつながっている。

すすくすスクールという事業は、単なる居場所づくりという観点ではなく、豊かな人格を育む事業として推進している。

多くの人と人との交流やさまざまな体験を通して、子どもたちが大きく育つことを願い、また、そうして育った子どもたちが、やがて地域教育を支える担い手として、成長した姿で還ってくる。それを願っている。

福井県小浜市

福井県小浜市

御食国若狭おばまの
「食のまちづくり」

市長 ● 松崎晃治

「食のまちづくり」と
「生涯食育」

小浜市は、福井県南部、若狭湾のほぼ中央に位置する、自然環境の豊かなまちである。古代より、大陸の玄関口として栄え、仏教文化の伝来ルートであったことから、市内には、国宝の明通寺をはじめたくさんのお寺がある。また、飛鳥の時代には、若狭湾で収穫される豊富な海産物や塩を朝廷に献上した「御食国（御食天皇の食材）」であった。そして、北前船の寄港地として全国と結ばれたことが、さらにこの地域の食文化を発展させ、江戸時代から近代にかけて、海産物を京都へと運んだ道は「鯖街道」として現在も親しまれている。

市ではこの「御食国」の誇れる歴史と、今も連綿と受け継がれている豊かな「食」に光をあて、平成十二年より「食」を重要な施策の柱としたまちづくり、いわゆる「食のまちづくり」を開始、翌年九月には、全国で初めて食をテーマにした「食のまちづくり条例」を制定した。

この条例は、市民や事業者の参画のもと、協働してまちづくりを進めることを基本とし、「食」を育む農林水産業の振興や「食」を活かした観光の振興、森づくりや海づくりなど自然環境の保全、健康の増進や社会福祉の充実、食育の推進など各分野の政策の充実に努めている。

特に食育については、重要な分野として条例の中に位置づけ、人は命を受けた瞬間から老いていくまで生涯を通じて食に育まれることから、

「生涯食育」という概念を提唱。そして、「身土不二」の理念に基づく地産地消とともに、就学前幼児の料理教室「キッズ・キッチン」や校区内地場産学校給食、成人向けの各種料理教室、ふるさと料理の会食など、ライフステージに応じた、きめ細かな生涯食育事業を積み重ねてきた。

新しいステージへ

このように、全国に先駆けて取り組んできた小浜市の「食のまちづくり」の各政策は、たびたび国内外のマスコミに取り上げられ、数々の全国的な賞も受賞した。各地から視察に来られる方々も後を絶たない。最近ではNHKドラマ「ちりとてちん」の舞台としてや、市民グループ「オバマを勝手に応援する会」(注1)の活動を通して、全国から注目を浴びるようになった。



学校給食畑に設置された感謝の看板

今後市民とともに、これらの時機を逃すことなく、食のまちづくりを通して培った「地域力」により、小浜の魅力にさらに磨きをかけ、地域の経済や産業の発展にも結び付けていきたいと考えている。

例えば、食のまちづくりを通して定着した農林水産業の体験、キッズ・キッチンなどの各種料理教室のノウハウや理念などを、着地型観光メニューとして地域外の方にも提供していこうと、現在、観光局設置に向けて準備を進めている。私は、市民が実感するこのまちの魅力や豊かさを、地域外の方々にも共感していただくことが、さらなる地域の発展につながると期待している。

市民参画で進めてきた、小浜市の食のまちづくりは、まだまだ未知の可能性を持っている。今後、どんなに時代や社会が変わろうと、われわれが食のまちづくりを進めていく上で合言葉にしていた「あるもの探しのまちづくり」を忘れることなく、地域資源を大切に守り育てながら次代に繋いでいく暮らし方の魅力を地域内外に発信していきたい。

(注1) アメリカ合衆国オバマ大統領を応援する小浜市民グループ。大統領選挙のころから現在も、様々なイベントを開催している。

元気で安全安心な 社会をめざして



知事 ● 井戸敏三

今年の一月十七日、阪神・淡路大震災から十五年を迎えた。この間、幾多の困難に直面しながらも、県民の懸命の努力に加え、内外からの力強い支援を得て震災を乗り越えることができた。改めて心から感謝申しあげたい。

あの震災では、多くの尊い命とかけがえのないものを失った一方、命の尊さや助け合うことの大切さ、事前の備えの重要性などを改めて学んだ。この経験と教訓を、二十一世紀の社会づくりに生かしていくことは、被災地・兵庫の責務と考えている。

一つには、復旧復興の過程から生まれた安全安心を支える新たなしくみの推進である。震災後のボランティア活動の広がり、新たな公の担い手の出現であった。「ひょうごボランティアプラザ」を拠点にした情

報交換や相談、基金を活用した活動助成などにより、その育成と多彩な活動を支援している。

また、こころのケアの研究・普及は、「こころのケアセンター」を中心に、内外に活動を展開している。看護職が地域に向いて健康相談を行うことを通して、人と人とのつながりを育む「まちの保健室」の推進にも努めている。

災害に備える共助のしくみとして、平成十七年にスタートした「兵庫県住宅再建共済制度（フェニックス共済）」に基づく給付金が、昨年の台風第9号



高校生によるボランティア活動
(平成21年8月、台風第9号災害)



四川大地震被災地のテント村
(平成20年6月、兵庫県からテントを提供)

災害で初めて支給された。被災地の一日も早い復旧復興に貢献するものと期待している。

一方で、まだ課題も残されている。高齢者の見守りもその一つである。災害復興公営住宅の高齢化は一段と進んでいる。空き室等を活用した「高齢者自立支援ひろば」を開設し、常駐する支援者と地域住民が連携した支援システムの構築を進めている。

二つには、まちのにぎわいである。商店街に人々が戻ってこない所が多い。イベントなど集客対策をしてきたが、単発的なものではなく、継続的な事業が必要である。昨年、新長田で「鉄人28号」の十八歳像が設置されたが、このような復興のシンボルを中心に活性化を図っていきたい。

策の調査研究、人材の育成を努めるほか、学校、地域と連携した防災訓練を実施するなど、地域防災力の向上を図っている。

しかし、十五年を経て、記憶の風化が懸念される。昨年、復旧復興における百の教訓をまとめたほか、この一年間、「伝える」「備える」をテーマに、シンポジウム等を連続的に開催して震災の教訓の発信に取り組んできた。

また、震災の経験は、世界の共有財産として生かさなければならぬ。これまで、神戸に立地する国際防災復興協力機構やアジア防災センター等の機関と連携して、国内のみならず、トルコや台湾、二年前の中国・四川大地震など海外の被災地へも職員等を派遣し、その復旧復興を支援してきた。先に大地震が発生したハイチにも、できる限りの支援をしたいと考えている。

防災の取り組みに終わりはない。震災十五年の節目に、「1・17は忘れない」の言葉を改めて胸に刻み、今後とも、自助・共助・公助の確立に努めつつ、内外の災害の経験を共有しながら、一人ひとりが日頃から災害に備える減災社会、安全安心な社会の実現をめざす。ご支援ご協力をよろしく願いたい。

愛媛県東温市

エコ・キッズを育てる

まちづくり



市長 ● 高須賀 功

東温市では、平成十七年度に新エネルギービジョンを策定したことをきっかけに、生活環境課（現市民環境課）内に「新エネ推進室」を設置し、環境基本計画とバイオマス・省エネの各ビジョンを策定した。

現在、「環のまちづくり」ロハスタウンを目指して、地球温暖化やエネルギー問題に取り組んでいる。なかでも、エコ・キッズ支援事業に独自の展開がある。

乳幼児期から始める環境教育

市では、市の行政活動によって排出するCO₂を、一トン当たりの金額で換算し、市の環境負荷分をエコ・キッズの環境学習などに投資する「ミティゲーションシステム（地球環境負荷の緩和措置）」という、独自のシステムを構築している。

これは、平成十六年度の市行政活動に伴うCO₂排出量四千九百トン

を基準に、CO₂を一トンにつき五百円として、約二百五十万円を毎年度予算化し、継続的に地球環境教育に取り組むものである。このシステムにより、エコ・キッズや市民グループ等の取り組みをサポートし、さらに大きなCO₂削減を目指す。

啓発活動として実施している乳幼児期から始める環境教育（「ことこクラブ」、木育推進事業）は、すでにCO₂削減効果があるものではないが、未来のエコ・キッズ、エコ市民育成への投資として、継続して行っている。

地球環境を救う最強カード

市は環境学習の一環として、食育・木育などを推進するほか、省・新エ

ネルギー教室開催や、公共施設のグリーン化を進め、子どもたちが遊びと学びと生活やまちの景観から環境を見つめられる工夫をしている。

1. エコ・キッズ・フェスティバル
毎年、市内全七小学校の五年生を中心に、エコ・キッズ・フェスティバルを開催。フェスティバルは、環境漫才やサイエンスショー、多面から環境を見つめる分科会等で構成される。特に、サイエンスショーは、温暖化のメカニズムを理解するうえで切り離せない理科（科学）への学習意欲を高めるために力を入れている。

また、分科会には地元企業のCSRによるエコセミナーのほか、愛媛大学や県立科学博物館等から講座の提供を受け、子どもたちが温暖化・エネルギーなどに関心を持ち、考え行動する力を育む仕組みづくりをしている。

2. KidsISO 14000プログラム

環境マネジメントの手法をゲーム感覚で学ぶKidsISO 14000プログラム（NGO国際芸術技術協力機構）を平成十四年度に導入し、夏休みを利用して家庭で温暖化対策に挑戦するエコ・キッズに配布・実施し、これまで約八百名の児童が挑戦している。

自分の省エネ行動による節約成果が数値で分かるので、子どもたちは夢中になる。その結果、家族にも省エネを呼びかけ、大人も巻き込み、地域や大人を動かす原動力になっている。

エコ・キッズを中心に協働する地域づくり

エコ・キッズ・エネルギーは家庭にとどまらない。市内では、エコ・キッズを中心とした、地域や学校が協働する取り組みが多く見られる。

上林地区が実施する「上林ひまわりプロジェクト」や、市民団体が地元の西谷小学校の児童を対象に自然体験教室を定期的に開催するなど、エコ・キッズは地域にしかない自然資源（「まちの宝」）で学習する機会を与えられている。

これらの取り組みが、今後、地域や市民団体、大学、地元企業が協働



環境学習の様相

する取り組みへ、さらに市全体に展開へと飛躍できるよう行政として応援していきたい。

世界一のクラゲ展示で 地域活性化に貢献



鶴岡市立加茂水族館館長

東北の片隅にある、小さな水族館の四十六年間は、大きな波に翻弄された波乱の物語にも似ている。

昭和三十九年（一九六四）、鶴岡市によって建設され、四年目の六月に民間の会社売却されて以降、平成十四年三月末までの三十五年間、民営の水族館として独自の経営をしてきた。

その間、隣県に新しい水族館が次々に建設され、加茂水族館自体の老朽化などもあり、入館者の減少が続いた。平成九年にはオープン時の半分以上の入館者まで落ち、「いよいよ倒産か」と覚悟した。

倒産を覚悟した時に一筋の光

その年に、たまたま展示した「活きたサンゴの水槽」から、小さな生き物が泳ぎだした。これがクラゲと

の最初の出会いだった。

飼育係の誰一人クラゲだと分かる者がいなかったが、餌を与えたところ、サカサクラゲになった。これを展示したらお客さまが大喜び。この姿を見て初めて一筋の光を見た。

毎年少しずつ展示の種類を増やしていったら、それにつれ入館者も増えていった。平成十二年には「日本一」の種類

数を展示できた。しかし、入館者は思うように増えなかった。

そこで考えたのが「クラゲを食べる会」



大当たりした「クラゲを食べる会」



小学生を対象にした「クラゲ学習会」

だった。泳いでくるクラゲを捕らえてきて、「クラゲしゃぶしゃぶ、ナタデココ風クラゲココ、姿造りクラゲ寒天」等の料理を考えて実行した。

狙いは当たり、大きな話題となって日本中に流れていき、クラゲの展示を多くの人が知ることになった。これが発展し、多くのクラゲ土産、クラゲ料理が開発され、テレビや新聞、ラジオ、雑誌などで紹介されるようになった。

その代表が「クラゲ入り饅頭、羊羹」である。このようなアイデア商品と料理が入館者と売上高を増やし、それを資金として自力で少しずつ、一歩一歩展示を充実していった。

新商品開発は地元の業者に依頼販売し、入館者が増えることで雇用も増加した。また近くの温泉に協力し、

クラゲ料理を指導、多くのホテルの特徴の一つとして喜ばれている。

クラゲの展示を始めて間もない平成十一年から、繁殖室で小学生を対象にクラゲの生態を教える「クラゲ学習会」を始めた。

補助金に頼らない自力経営

全行程を活きた実物を使ったこと、繁殖室の中で行ったことなどが効果を発揮した。今では子供のみではなく、中学生、高校生も老人クラブも希望者にはすべて行っている。

平成十七年、クラゲの展示種類数が「世界一」になった。そして平成二十年十月、下村脩先生がオワンクラゲの研究によりノーベル賞を受賞することが決まった、との大きなニュースが飛び込んできた。

同じクラゲという共通の生き物を通して、先生との交流が始まった。これまでの交流を経て、平成二十二年四月には、当館にお越しいただくことが決まっている。

築四十六年と古くなった加茂水族館は、建て替えの準備が進んでいるが、これまでと同じく、補助金に頼らない自力での経営を目指し、世界でたった一つの「クラゲを見せる水族館」を建設する予定である。

渋谷秀逸氏

「たずねまほしき園原」
をめぐって

月川温泉旅館「野熊の庄 月川」代表取締役

長野県阿智村園原地区は、古の東山道「神坂峠」の麓に位置し、長野県歌「信濃の国」にも「たずねまほしき園原や（訪ねてみたい園原）」と詠われた歴史の里だ。

この山里に、平成四年、中央自動車道園原インターチェンジが開通した。中央道恵那山トンネルと園原インターチェンジ関連工事の過程で残土捨場となった園原には、地域の発展への期待とは裏腹に、土砂でうず高く埋め立てられた台地がいくつもできていて、新緑の山々も見えぬ荒涼とした里となっていた。

地域ぐるみで花桃の里づくり

私の胸の内には「せっかく嫁いで来てくれた若い娘たちが嫁ぎ先を自慢出来るような集落にしたい、そして愛着をもって若い世代が住み続け

られるような地域にしたい」という思いが募っていた。そんな時、通りかかった隣村で見つけた「花桃」の赤、白、ピンクの三色に咲き分ける花に魅せられ、「この木をなんとしても植えてみたい」と思い、台地への苗木の植樹を始めた。

最初のころは失敗もした。肥料焼けで木が枯れてしまったり、道路沿いに植えた苗木が誰かに持ち去られることもあり、盗まれぬようにせっかく膨らんだ蕾を摘んで目立たなくしたりしたこともあった。

十数本からスタートした花桃の植樹であったが、徐々に地域の人々の協力が得られるようになり、平成十四年には「花桃の里づくり委員会」が組織され、園原地域全体の取り組みに発展してきた。

花桃の木は現在、約三千五百本に

まで増え、川沿いの約四キロメートルにわたって植えてあり、毎年四月下旬から約三週間、花が楽しめる。花の色合いは木によってさまざまで、単色もあり、枝ごとに三色を咲き分けるもの、一つで三色の花弁を咲かすものもある。ここまで増やすことができたのも、共感していただいた地元の皆さんの力や行政の支援があつてこそ、と感謝している。

「花桃まつり」のにぎわいを
将来に

平成十四年に地元のテレビ局が花桃の咲き誇る姿を生中継したことがきっかけで、放送翌日には花を目あてに多くの人が山里に押し寄せた。翌年からは地域住民が主体となって「花桃まつり」を開催し、近年はまつり期間中に二十万もの人が訪れるようになった。

丹精し

た花桃が育って、大勢の人が見に来ることはありがたいが、三千五百本の花桃の管



昭和60年頃の園原



現在の園原

理や祭りの運営は、地域のボランティアだけではとても担いきれなくなってきた。幸い昨年から、阿智村をはじめとした行政の積極的な参画を得て、官民協働による祭りの実行委員会をスタートさせることができた、ありがたく思っている。

園原の里は、伊勢湾台風以来、幾度も大きな水害に見舞われ、多くの田畑が土砂に埋まった。苦難に遭ったが、仲間が協力して乗り越えてきた私たち園原の住民の思いは、自分たちの住むところを、訪れた人たちに「いいなあ」と、一言いってもらえる、そんな地域にしたいというやさやかな願いである。

今は、徐々に若い世代に活動の主力を引き継いできているが、花桃の里づくりを通じた「たずねまほしき園原や」への思いは消えない。

農ある暮らしを実現し 心を結ぶ定住促進に尽力

豊田市社会部足助支所地域振興担当

● 井上美知代

三方を緩やかな山林に囲まれた「洞」と呼ばれる土地にある、豊田市野林町の高嶺下。紅葉で有名な「香嵐溪」がある足助地区の南西部に位置する。ここには、山の斜面を生かした個性あふれる五軒の戸建住宅と、一棟の集合住宅が佇み、都市から移住した十二世帯三十五人が暮らしている。

二十七戸だった野林集落は現在、四十戸になった。高嶺下からは朝夕、元気な小学生たちが集団をなして登下校する姿が日常風景になっている。平成十年から地域で取り組んできた、定住促進活動の成果である。

定住者のよき相談役となり 地域住民との橋渡し役に

平成十年、地元小学校の校舎建設を機に、過疎化の抑止と地域の活性化をめざした旧足助町の定住施策



鈴木公平市長と並ぶ梶氏（左側）



稚木林自然観察会の参加者と（前列左端が梶氏）

「高嶺下ファームビレッジ構想」がスタートした。従来型の大規模開発ではなく、「里山の暮らしの豊かさを生活に取り込み、既存集落とも連携を取りながら農的暮らしを実現する」がテーマだ。

構想を推進するため、地元組織「桝快委員会」が立ち上がり、梶氏は代表としてよそ者の転入に心配する地域住民を「この機会に何とかしなければ集落が成

立しなくなる。自分が責任を持ってやる」と必死に説得した。

「まずは交流活動から」と、山里ならではの数々の交流イベント（自然観察会、田植え、稲刈り、草刈、餅つきなど）を年四〜五回実施してきた。

定住者の相談役、地域住民と定住者の橋渡し役として、常に定住者と地域住民のそれぞれの思いを大切にしてお互いが理解し受け入れられるようにと、労力を惜しまず、山里ならではの交流イベントを、地元住民の協力を得ながら行った。

当初は百世帯を超える希望者がいたが、イベントを重ねるうちに、真剣にこの集落に住みたいという人たちが絞られ、六世帯の入居が決まった。過疎が進む中山間地域でありながら、野林町では人口が増えている。

都市から移住した若者たちに刺激されて、地元出身の若い世代がUターンする動きも見られるようになった。

住民にとっても、この活動は自信になっている。交流を重ねることでお互いが理解し、よりよい定住ができることを、足助地区住民へ知らしめた。高嶺下の取り組みは、足助地区で推進する定住モデルとなして、集落に二〜五戸くらいの小規模宅地を分譲する「2戸2戸（にこにこ）作戦」へと波及し、平成十四年度から実施されている。

都市と農山村の 交流活動として定着

平成十四年度からは「炭焼き塾」を開催。炭焼き技術を伝承するとともに、里山環境を考える活動にも力をいれている。現在では年間約六百人が同地区を訪れ活動している。

梶氏は「この受賞はここに住んでくれた人たちと、受け入れた地域のみなさんのおかげ。私はその代表として受けた。また、応援してくれた建築士やコンサルの方、大学関係者のみなさん、行政の支援や協力もあつたらから。そして今、多くの人に囲まれて私は人生で一番幸せ」と述べる。

「今後は、『ここに住みたい』という人のために、高嶺下での取り組みが足助地区全体へと広がっていくことを願い、地元でも他地域でもがんばらなくては」と語っている。

物産品PR、地域情報発信で効果

—東京都内に43店舗、出店ブームに—

地域活性化センターでは、平成二十年から東京都内にある自治体アンテナショップの活動の支援を行っている。今回は、その一環として東京都内ショップの実態調査を、都道府県を通じて行った。

昨年十月現在の出店数は四十三店舗で、これまで集中していた有楽町・銀座地区から最近是新橋、八重洲、日本橋周辺でも出店が見られるな



自治体情報をそろえた「ふるさと情報プラザ」(東京・有楽町)

ど、面的な広がりを見せている。

アンテナショップ開設の効果として「自治体や特産品のPR」「地域情報の発信」などで、当初の目的どおりの成果を上げており、「消費者ニーズの把握や市場調査」などについては目的以上に効果が得られているとの答えが多かった。その半面、「観光案内・誘致」では期待したほどの効果が得られていないことも判明、今後の課題となっている。

事業内容、運営効果など十六項目について調査

「自治体アンテナショップ」とは、単なる観光案内や事務所機能だけではなく、地域の総合情報を受発信するとともに、特産品販売や飲食施設等を設置している店舗である。

調査対象は、①自治体が主体となつて設立した施設(運営は民間セクター等でも可)②東京都内にある常設施設であること。一年以内で終了する営業は含まない③観光案内所・事務所機能のみの施設は含まな

いなどの条件を満たす店舗。開設目的、事業内容、運営効果など十六項目について、平成二十一年十月一日時点で調査した。

回答結果によると、自治体アンテナショップ数は現在、都内に四十三店舗ある。内訳は都道府県三十三店、市町村十店である。ショップ数は、年々増加傾向にあり、図1の通り右肩上りである。その多くは銀座・有楽町地区にあり十四店と、全体の三二・五%を占める。最近では、新橋・八重洲・日本橋周辺にも出店が相次ぎ、面的な広がりを見せている。

運営形態は多様、大学やコンビニとの連携も

運営形態も多様で、第三セクター、民間・NPO等への委託、産官学の協働などが全体の九三%を占める。最近の傾向として、大学、商店街組合、姉妹都市、コンビニ等と連携し出店し

ているケースも六店あった。自治体が開設し、その後も運営主体となっている公設公営の施設は、三店(七%)である。

当調査では、自治体アンテナショップを開設する際の目的と運営によつて得られた効果についても図2(重複回答)のとおりの回答を得た。結果は「自治体のPR」「特産品のPR」「地域情報発信(マスコミ等)」などで、ほぼ目的どおりの効果を上げているが、「観光案内・誘

図1



図2

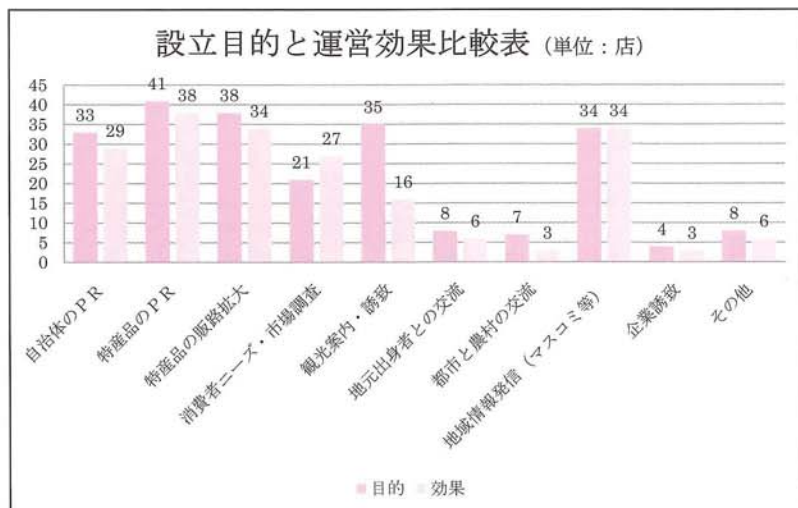


図3



他の大都市圏でも出店の動き

東京での自治体の観光物産案内所設置は、昭和八年、東京駅前旧丸ビル一階の「地方物産陳列所」(十五自治体)が記録されており(注1)、その後、昭和四十年代には、東京駅八重洲口の国際観光会館、鉄道会館に集積した(注2)。

当時は各自治体の小規模ブースが集合する形態であり、現

ショップは、飲食施設を併設する傾向があり、九店中四店が運営している。有名シェフがプロデュースする本格イタリアレストランやカフェで地元の食材を使った料理を供し、従来の郷土料理とは異なる違うスタイルッシュな店舗が出現し、注目を集めている。

設問項目「セールスポイント」(自由記載)においても、食品についての記載が多く、三〇店から具体的な食品の説明・PRが記載された。「食」による誘客を図っていることが窺える。

在のような大型の独立店舗「自治体アンテナショップ」が出現したのは、平成六年ごろからで、八重洲地区の再開発による移転問題と、先行して出店した銀座わしたショップ(沖縄県)、かこしま遊楽館(鹿児島県)の成功例が他団体を誘引した。

このように先人たちの努力が実り、現在では地方ブームが呼び水となり、北海道フードイスト(北海道)、ザ・博多(福岡県)、遊食豚彩いちにいさん(鹿児島県)など、自治体のアンテナショップではない民間の物販・飲食店も増えつつある。

また、今回の調査対象ではないが、大阪・名古屋・福岡の大都市圏にも自治体アンテナショップを出店するケースも徐々に増えている。

今後は、店舗の売り上げ追求だけではなく、本来的なアンテナ機能をさらに充実させる一方、供給元である地域ならではの「人」「モノ」「文化」を掘り起こし、紹介する新たな展開が期待される。

ふるさと情報プラザ ● 畠田千鶴

(注1)「都道府県等東京事務所・アンテナショップ案内」(平成十二年二月十日 財団法人 地域活性化センター調べ)

(注2)三菱地所(平成五年)「丸の内百年のあゆみ 三菱地所社史」

致」は、目的の半分以下しか効果が得られておらず、事業の取り組みの困難さがうかがえる。一方、消費者ニーズ・市場調査等は、目的を上回って六店が効果を報告している。

商品・飲食の売り上げや入館者数は、事業内容、店舗規模などと密接に関係があり、数値の高低だけではアンテナ機能の評価は困難だが、以下の通りの傾向が見られた。

平成二十年度の報告にあった三十三店のうち、二十店が一億円以上売

り上げており、全体の約六〇・六%に当たる。また、同年度の入館者数は十万人未満が十六店、十〜二十万人未満が七店、二十〜五十万人未満九店、五十〜百万人未満四店、百万人以上二店 不明五店であった。

入館者が重視するのは物産販売と飲食施設

事業内容の調査の結果は、図3(重複回答)のとおりで、すべてのショップで物産販売が行われている。また、平成二十〜二十一年に開設された

独仏に見る地方公共交通と 景観・デザイン都市づくり

まちづくりとリンクした
公共交通の活性化策
～ドイツ・フライブルク市～

日本における地方都市において、鉄道・バス等といった公共交通機関は、自動車の保有台数の増加により、衰退の一途をたどっている。筆者の出身地である山梨県では、人口千人当たりの自動車保有台数が約八百三十台、全国四十七都道府県中三位と、日常生活でクルマは必須である。

フライブルク市ではいち早く「脱自動車依存社会」を宣言し、市議会は一九七三年、地元商店街の猛反対にもかかわらず、市内中心部へのマイカー乗り入れを禁止し、歩行者と公共交通だけが通行可能な「トランジットモール」を設定した。

また、次世代路面電車（LRT）の延伸や自転車交通の普及・促進、一九八四年には公共交通機関をすべて利用できる環境定期券（一カ月三十五ユーロの地域定期券で市内の郊

外に広がるバス・鉄道・路面電車の総路線延長二千四百キロメートルを好きなか（け利用できる）を導入した。

これらの取り組みにより、同市の自動車保有状況は千人当たり四百五十台と、ドイツ全域の同六百五十台を大きく下回り、逆に自転車の保有については同八百五十台と、驚異的な数値を示している。

今回調査したフライブルク市交通公社でのヒアリングの際、驚くほどの人が溢れにぎわっていた中心市街地の活性化策について尋ねてみた。

同市では、日用品を販売する目的では郊外に出店できないこと、市内では一戸建ての住宅を建設できないこと、「Fプラン」という市議会の議決を経た拘束力のある土地利用計画で中心部の人口密度を意図的に高めていること、などが確認できた。

また、公共交通は公共的な「インフラ」という考え方に基づき、積極的に公費を助成することで利用料金

の低減を図っている。

一連の調査から、公共交通の活性化のためには、公共交通に対する施策のみに目を向けるのではなく、郊外のショッピングセンターや住宅建設に対する規制、まちなかへの人口の誘導策を含めた土地利用など、まちづくりを総合的に考える必要があることを痛感した。

山梨県においては、既に郊外の開発は進んでおり、郊外に対する開発規制をそのまま導入することは難しいと思われるが、既存の鉄道・バス・自転車等の組み合わせや、利用料金面での工夫により、自動車から自転車へとクルマ依存度を減らすことができるのではないかと感じた。

企画調査課 ● 有泉 学



フライブルク交通公社にて

中世のまち並みを残し安心して歩ける景観まちづくり
～フランス・トロワ市～

昨今、地域が持つ景観には、地域ならではの文化、生活背景、風土がみられ、地域特有の個性といった価値が見直されつつある。また、まち並みが魅力的な地域には、その景観を観るためにひとが訪れるようになり、まちの持つ個性を通じて地域住民の誇りにもつながっている。

今回視察に行ったトロワ市は、パリから南東約百五十キロメートル地点のシャパーニュ地方にある地方都市である。ヨーロッパでは珍しい木組みの家が並ぶ地域で、中世のまち並みを残している。

まち並みの景観保存にあたり、徹底的に修理・復元・保存を行っており、さらに住民や歩行者を優先した広場づくり、石畳の舗道づくりを行ったことで、魅力的な観光地へと変化を遂げている。

トロワ市では、指定区域内の建築物を修復保存する際には、必ず協議会に諮った上で取りかかるといふ。

協議会は景観・建築にかかる各専門家、事業者、住民、行政という様々なメンバーで構成され、ここでは賛成意見だけでなく、反対意見も引き出した上で調整を図り、計画を進め

ることになっている。

復元された家屋は、統一感のあるまち並みの中にあっても単一的な建築でなく、また、カラフルな家屋群となっても全体のバランスが崩れていない。各々の個性が壊されておらず、専門家の視点がいかに重要であるかが表れている。

また、建築以外の景観にかかる具体的な施策には、歩道のバリアフリー化や、駐車場化していた教会の広場を市民の憩いの広場へと変えたことが挙げられる。地上の駐車場は、まちの中心部につくられた地下駐車場へ集約させたことで広場の確保が可能になった。

地下駐車場によって、地上で約百台しか停められなかった車が四百六十台も収容可能となり、まち並みを往来する車は減り、ひとが安心して



トロワ市内の様子

歩くことができるようになった。

地下駐車場の上は、国の機関や二つの教会が近くにある開放広場となっており、観光客や市民の憩いの場としてにぎわっている。

トロワ市のまちを実際に歩くと、まるで中世にタイムスリップしたようである。また、修復保存されたまち並みの中には、中庭が開放されていたり、家屋の柱に彫刻が施されていたり細かな発見がある。

観光で訪れた人が歩いてまちを自由に散策できるとともに、発見があるというサプライズでリピーターを増やしている。魅力的なまちとは、住む人も訪れる人も快適なまちであると改めて考えさせられた。

業務第一課 ● 瀬戸みどり

デザインによる都市の魅力発信

ドイツ・ベルリン市

近年、製造業が衰退したヨーロッパにおいて、芸術家やデザイナー、建築家など、創造的仕事に携わる人の力で都市を再生させる動きが活発化している。

日本でも、それにならって創造産業により地域の活性化を目指す動きが活発化し、ユネスコの「世界創造都市ネットワーク」への登録を目指す

自治体も増えてきている。

そこで、ネットワーク登録のメリットや他地域との連携を学ぶため、デザイン産業が盛んで、ネットワークにデザイン分野で登録されているドイツ・ベルリン市を訪ねた。

創造都市ネットワークとは、文化の多様性を保護するとともに、世界各地の文化産業が有している様々な可能性を、都市間の戦略的な連携によって、最大限に発揮させるための枠組みで、ユネスコが平成十六年に創設したものだ。現在、世界十九都市が登録されており、日本では平成二十一年に神戸市、名古屋市、平成二十一年に金沢市が登録されている。

「登録の最大のメリットは、創造都市としての知名度のアップであり、ネットワークそのものが何かをしてくれるとは思わない方がよい」

登録申請段階からプロジェクトに携わっているベルリン市の担当者ターニャ氏はこう語った。

実際、ベルリン市も登録当初はユネスコからの様々な支援を



ベルリン市役所で担当者から話を聞く

期待していたが、何もなかったという。ターニャ氏曰く、登録後の発展は「都市が自発的に何をするか」に掛かっているようだ。

その言葉を裏付けるように、ベルリン市では独自に、国内外での数多くのデザイン関連プロジェクトや、他の登録都市であるモントリオール、ブエノスアイレスとの連携事業など、精力的な活動が行われている。

来年には、市内にクリエイティブセンターがオープンし、その中で様々なデザイン産業に関連するサービスが提供され、他の登録都市の常設展示も検討されているそうだ。

日本の都市は、登録されてからまだ日が浅いが、今後、他の登録都市との連携など様々な活動を望むのであれば、まずは「自分たちが何をしたいか、誰に協力を求めるのか」をはっきりさせることが求められる。

そして、母国語がドイツ語でありながら、ターニャ氏が国際会議でのスピーチや発言をすべて英語で行っていると聞き、連携事業がスムーズに行えるような語学力を含む国際交渉力が必要である、と痛感した。

業務第二課 ● 千葉雅恵

調査地で学んだまちづくりの精神

大杉ゼミ



埼玉県行田市

菅原広志

地域活性化センターは、全国各地で地域づくりの中核となる人材を育成するため「全国地域リーダー養成塾」を開催している。この中で、各地の地域づくりの先駆者を訪問し、現地のキーパーソンから学ぶ現地調査をゼミごとに実施している。今回は、三つのゼミの現地調査の概要を塾生によるリポートで紹介する。（研修交流課）

大杉覚主任講師（首都大学東京大学院教授）の指導のもと、平成二十一年十月二十六日から三日間、愛媛県上島町、内子町、八幡浜市及び伊予市を現地調査した。

「しまの会社」の取り組み

上島町は、弓削町、生名村、岩城村及び魚村の離島の合併による、人口約七千五百人の小さな町。ここで、株式会社「しまの会社」を設立し、地域づくりを行っているのが兼頭一司氏である。

しまの会社は、「島民の」（島民が出資、所有し）、「島民による」（島民が運営し）、「島民のための」（利益を



しまなみ海道を背景に

地域に還元する）ことをコンセプトとし、豊かな自然に囲まれ、魅力的な人たちの住む島で一生住み続けていけるよう、「逆転の発想」を基本とする様々な取り組みをしていた。

例えば、商品輸送の物流時間がかかることを逆手にとり、届いた時にちょうどよい干し加減となる「着いたら一夜干し」といった商品の開発や、耕作放棄地を「地域再生のシンボル」とするため、都会の人の就農体験の場とするなどの取り組みであ

る。しまの会社は、この取り組みが「共生・共助の地域コミュニティ」のモデルとなり、日本全体が元気になることを目指している。

内子町の町並み保存

内子町では、長く町並み保存に取り組んでこられた元町職員の岡田文淑氏から「真のまちづくり」についてうかがった。「まちづくり、地域づくりは、『係だから』とか『担当だから』と言っているうちはできない。担当が外れた後も地域に関わり続け、住民と共に汗をかく覚悟がなければ、手を出すべきではない」との熱い言葉をいただいた。

同じ内子町の「石畳を思う会」の寶泉武徳氏からは、厳しい土地条件での地域づくりについて話をうかがった。石畳地区は人口約三百五十人、高齢化率四〇%を超え過疎の進む中山間地域だが、先祖から受け継いだ地域を守っていくため、かつて使用していた水車小屋を自分たちの手で出資・復元した。これを活用した水車祭りには、毎年千人以上が訪れ収益が上がるまでになった。町か

らの補助金は一切なく、真の意味で自立した地域づくりを行っていた。

八幡浜市のボランティアガイド

八幡浜市では、ボランティアガイドの取り組みについて、NPO全国町並み保存連盟理事である岡崎直司氏、八幡浜市教育委員会の宇都宮菜乃氏から話をうかがった。岡崎氏の「地元の人が気付きにくい、地域の持つ『強み』を、早くから知ることが重要。『地域の宝』が失われないよう、地域の強みを知ったら、誇りをもって外にアピールすべき」との言葉が特に印象に残った。

伊予市（旧双海町）の夕日を活かしたまちづくり

旧双海町の職員であった若松進一氏からは、「夕日」というどこにもでもあるものを、知恵を絞ってまちづくりに活かした取り組みについてうかがった。海岸沿いに整備した公園は、年間約五十五万人が訪れるまでになっている。「他の市町村を見習わない。見習ったら規模の大小の勝負になる。オンリーワンであれば自分たちの汗と知恵があればできる」という、まちづくりの精神を学んだ。様々な地域づくりのリーダーたちは、自分たちの住む地域が大好きで、まちづくり・地域づくりに並々ならぬ情熱を持っていることで共通していた。

地域の「宝物」を継承する取り組み

沼尾ゼミ



岩手県 ● 女鹿智恵

沼尾波子主任講師(日本大学教授)の指導のもと、平成二十一年十月二十八日から三日間、福井県小浜市、越前市、岐阜県白川村において、現地調査を実施した。

観光振興と「食」への取り組み ～小浜市

小浜市は、「オバマを勝手に応援する会」が民間から立ち上がったことや、テレビドラマ『ちりとてちん』の放送により、知名度を上げている。放送後は観光客が一五%アップ、飲食店の売上げも五〇%アップ、ドラマで有名になった若狭塗箸の売り上げも十倍以上になった。これらは民間主導の取り組みであったが、若狭おばま観光協会もバックアップした。市観光交流課の中に観光協会があり、一緒に動けるスタイルは合理的で効率が良い。

同じく小浜市では「食のまちづくり条例」を制定し、「生涯食育」を推進している。御職国若狭おばま食文化館をオープンし、幼児を対象とした「キッズ・キッチン」、学生を対象とした食の教育、高齢者を対象

とした栄養指導等、各世代への「食育」を展開。「料理で」子供の様々な能力を引き出す「教育」の場としても効果が期待される。

「鯖街道」熊川宿のまちづくり

小浜市若狭熊川宿では、暮らす人が生きていくことに重点を置いたまちづくりをしている。重要伝統的建造物保存地区に選定されるまで、住民の合意形成に約十五年を要した。道路整備や川の整備には、熊川宿の地区としても出費をし、地元も汗をかく。空き家の持ち主に対してふるさと協力金として協力金の依頼を行い、協力者には町並み通信の発送を行う。

越前和紙の再生・活性化

越前市の和紙づくりにおいて、原料等の共同購入事業を実施する和紙組合のメリットは、組合員は一つからでも仕入れができるようになり、資材の在庫負担が少なくなること。越前和紙の後継者育成事業では、越前和紙青年部会を構成して、新商品の開発、原料・資材の研修、異業種交流

の実施、研修生の受け入れをしている。ランチョンマットやタペストリー等の商品開発をし、他産業との連携を進める。

同じく越前市では、商工会議所、まちづくり会社、地域住民代表者等により協議会を設置し、コンパクトなまちづくりを進めている。タンス町通り屋台まつり、越前そば等のソフトの整備も進める。

バスが駐車できる「まちなか駐車場」を設置、休憩・観光案内所の「まちなかプラザ」と「武生語り部の会」との連携、和菓子を通る「食べ歩き」ツアーを提供し、観光バスの誘客に成功した。

世界遺産登録をめぐる 現状の課題～白川村

白川村は、平成七年「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として世界遺産登録された。電線の地中化、下水道整備、防火体制を整備し、景観保全に取り組む。子供たちが祭りに参加したり、屋根の葺き替

え作業に関わったりして、地域の文化・芸能を継承している。

平成九年に「(財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団」が設立され、駐車場管理受託事業、文化財建造物の修理のための設計管理事業等を推進する。また、交通渋滞、住民のプライバシー、ゴミ公害等の課題の対策にも取り組んでいる。

訪問した地域では、地域の「宝物」を、住民が早い段階で認識し、守ろうと先頭に立つリーダーがいることで、活性化につながっていた。地域コミュニティを同じベクトルに向けるリーダーの存在の大切さを実感した。



白川郷をバックに

まちを想う熱意が地域を元気に

後藤ゼミ



茨城県桜川市

中野恵実

後藤春彦主任講師（早稲田大学教授）の指導のもと、平成二十一年十一月八日から三日間、大分県日田市、別府市、宇佐市、豊後高田市において現地調査を実施した。

歴史的景観維持によるまちづくり～日田市

日田市豆田地区は、平成十六年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、江戸・明治・昭和初期の建物が混在しているのが特徴である。昭和五十年代にＪＲ日田駅前地区の区画整理がなされ、商業機能の移転により既存の商店街が衰退した。

この状況を危惧する住民が中心となり、古い町並みを活かしたまちづくりが行われ、住民による保存会をはじめ、建築士などによるＮＰＯ法人、市等が協力して家屋の修理などの基本ルールを決め、建築物の修理や改修について「こだわり」をもって取り組んでおり、外壁や時代ごとに違う瓦の模様などを再現している。豆田地区では、見た目だけではない本物の伝統が残るまちづくりを

行っている。

路地裏散歩的地域づくり～別府市

別府市のＮＰＯ法人ハットウ・オンパクの活動は、地域のシンボル竹瓦温泉の解体問題で地域が廃れるのではないかとという危惧から、保存のため路地裏散歩を始めたことがきっかけ。現在では「別府八湯温泉泊覧会（通称オンパク）」を開催している。オンパク開催期間中は、町中で商店から一般市民まで様々な人がイベントを開催している。同法人はイベントを「やりたい人」と「参加したい人」の中間支援の役割を担う。

オンパクは、別府市に訪れる観光客向けに行うのではなく、地元住民に対して別府市の資源探し、まちづくりに関わるパートナーを育てる人材育成を目的に行われており、その手法は全国に広がっている。

安心院町グリーンツーリズム～宇佐市

宇佐市安心院町でも農業が衰退しつつあった。農家を何とかしたいという思いから、安心院町グリーン

ツーリズム研究会が発足した。安心院町の農家民泊は一泊朝食付を基本としている。「地元還元」の理念のもと、農家民泊客に対し、夕食を地元の飲食店で摂るよう薦めている。農家民泊を始めたころは、旅館業法はじめ食品衛生法規制が立ちはだかったが、県・市に訴えかけ規制緩和が実現した。

現在は、修学旅行生も受け入れており、最も多い農家では年間六百～七百人の宿泊がある。民泊を行っている農家の方々が「地元」に誇りがもてるようになった」と話していたのが印象的であった。

昭和のまちづくり～豊後高田市

豊後高田市の中心商店街は、江戸時代から昭和三十年代にかけて栄えたが、その後は「犬猫しか歩かない」と言われるほど衰退した。

状況を危惧した一部の商店主や商工会議所が立ち上がり、大手広告代理店に再建プラン策定

を委託したが、街の規模と財政状況からも困難な計画であり、住民も望んでないため頓挫。自分たちで再建することに意識が変わり、徹底的に街の歴史を調査した。

商店街が元気だった昭和三十年代のにぎわいを取り戻すため、昭和のまちづくりに着手。現在は年間約三十万人の観光客が訪れるようになった。とは言うものの、観光だけが目的ではなく、地元の生活の場としての商店街という基本を忘れないまちである。

ゼミ生にとって、熱い人々と出会い、実際に現地を訪れた経験は貴重なものである。この経験を生かし、自分たちの地域の活性化に貢献していきたい。



宇佐市安心院町にて



那須塩原市長 ● 栗川 仁

自立とやすらぎの都市を目指して

那須塩原市は、栃木県の北部に位置し、首都東京から百五十キロメートル、県都宇都宮から五十キロメートルの距離にあります。市域は五百九十三平方キロメートルと広範で、標高は海拔二百メートルから千九百七十七メートルと地形的变化に富み、市域の半分は塩原温泉や板室温泉、沼原湿原、溪谷などの観光地を擁する山岳地帯です。

海拔五百メートル以下の平地部には、国道四号や四百号、JR東北新幹線や東北本線的那須塩原駅、黒磯駅、西那須野駅、東北縦貫自動車道の西那須野塩原ICや黒磯板室ICを有する交通の要衝で、栃木県北の玄関口となっており、その周辺に市街地が形成されています。さらに、内陸型工場が多数立地し、近年は、アウトレットモールを含む大型店が進出し、農林業・観光業・商業・工業の農観商工が調和した産業が展開されています。

本市は、森林資源四百平方キロメートル、農地面積百平方キロメートルを有し、年間観光客九百三十万人、製造業出荷額三千九百億円を数え、特に、生乳の生産額は本州一、全国でも四位にあり、農業産出額も全国十六位と首都圏への食糧基地となっています。

本市は、平成十七年一月一日、黒磯市、西那須野町、塩原町の合併によって誕生し、現在、人口十一万七千人が集う県北の中心都市となっております。

私はこれまで、市の将来像を「人と自然がふれあうやすらぎのまち那須塩原」と位置づけ、市民一人ひとりが豊かなみどりや自然を大切にしながら、安心して暮らし、夢や希望をもって「やすらぎ」を感じることができるようまちづくりを目指してまいりました。

一方、本市は江戸期の農地開墾、那須疏水が開削された明治初期の農場開拓、戦後の農地解放による開拓を経て、開拓精神が延々と引き継がれてきた地でもあります。これらの歴史を背景に、私たちに根付く開拓精神の根幹

は、同志の結びつきによる自主独立の精神であり、協働の中で地域を創っていくことです。また、ワールドでチャレンジ性があり、我慢強いこともさることながら、自然と親しく、自然から学んだ知識と知恵を持ち合わせています。

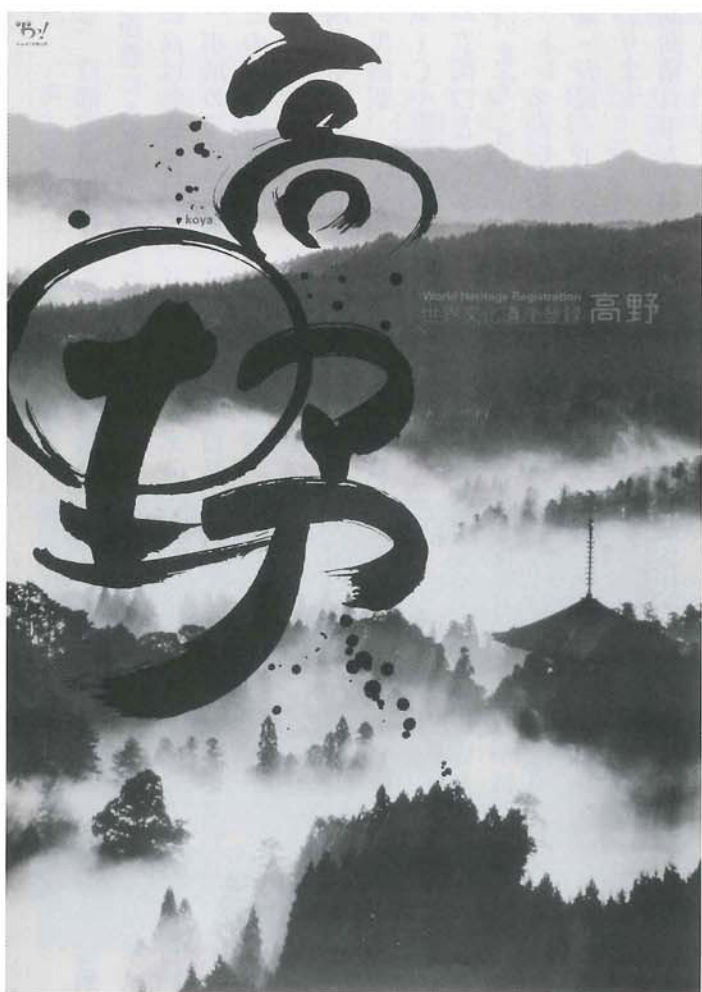
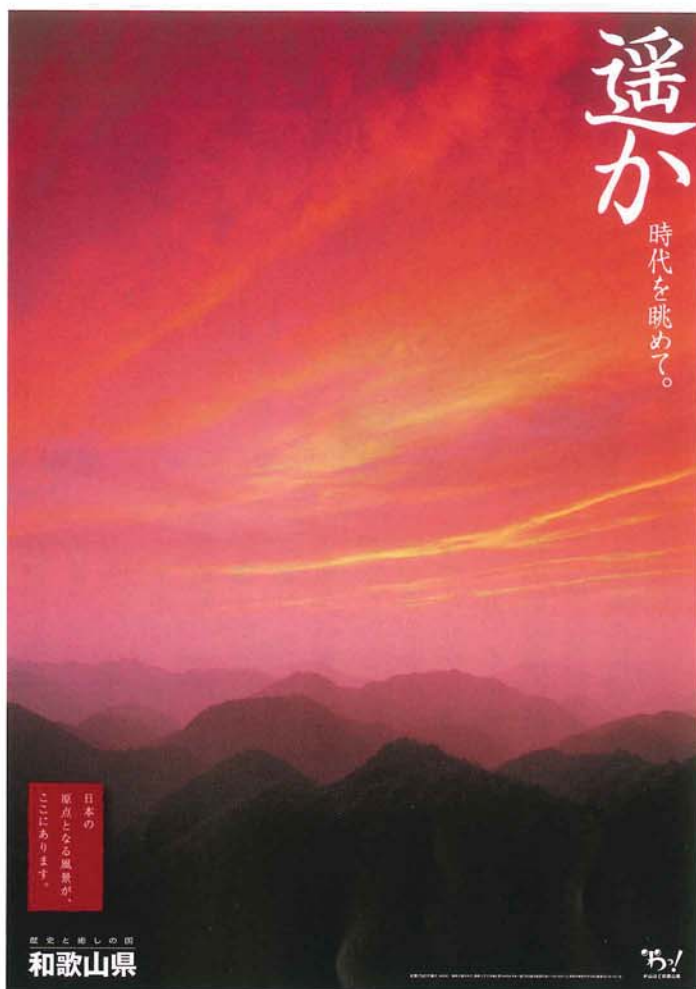
いま自治体は、「百年に一度」といわれる厳しい経済状況の中に置かれ、出口の見えない状況にあり、本市においても行政執行に必要な財源の確保に苦慮しているところです。

情報公開、行財政改革も欠かせないものではありませんが、この時にこそ、市民一人ひとりが持っている知恵や人間力そして事業者が持っている素材とノウハウを持ち寄り、その能力を最大限発揮すれば必ずや道が開けるものと信じております。そうした取り組みの一環として、市内十五地区で開催されている「車座談議」に地域担当職員九十名を配置し、情報交換と自発性・創造性に富む「市民との協働のまちづくり」の実践を始めています。

一例を挙げると、姉妹都市である茨城県「ひたちなか市」から太平洋に注ぐ清流那珂川の流域としての水保全、美化運動としての地域一丸となった河川の清掃、地域交流としての市民農園運営事業、足下を見直して将来につながるさと資源発見事業などが、市民の手で展開されています。

また、開拓で培った市民の知識と知恵を産業の振興に活かせないかと「農観商工連携事業」を立ち上げ、「食」をテーマとした交流を通し、豊富な資源を活用しながら、地域の活性化につなげていけたら...と考えております。

那須塩原市は、豊かな自然との共生を図りつつ、多様な景観やみどりと水の保全に努めるとともに、「住んでよかった」「訪れてよかった」と実感できるまちづくりに全力で取り組んでいるところです。



和歌山県

都道府県漫遊
POSTER GALLERY

地域つり

2010・3月号 46

手前みそ
ですが…

富山県

氷見市
ひみ

134

氷見市は、能登半島の東側基部、富山県の北西部に位置する人口約5万4千人のまちです。

「氷見の寒ブリ」は、全国的に名が通っていますが、ブリ以外にも美味しいものはたくさんあります。伝統の越中式定置網で捕れる漁獲量・種類ともに豊富でキトキト（新鮮）な魚介類をはじめ、県内一の生産量を誇る「氷見牛」のほか、米、ねぎ、自然薯、梅、ハトムギ等の農産品など、海の幸・里山の幸に恵まれたまさに「食都（しょくのみやこ）」です。

また、豊かな食材を生産するだけではなく、美味しく調理してお客様に提供する取り組みも盛んです。市、商工会議所、観光協会、宿泊施設、飲食店等が連携した食のイベントも年間を通じて開催されており、市民総ぐるみで「氷見の食」を前面に出した観光の推進による「食の全国ブランドのまち」を目指しています。

昨年10月には、市内2つ目のICが開通し、アクセスも便利になりました。美味しいものを目指して、ぜひ氷見への旅を計画されてはいかがでしょうか。



■「食」の総合イベント「『食都』氷見キトキトまつり」旬の食材を求め、毎年、全国から多くの方が訪れます。（今年も10月中旬開催）



■「食育」と「地産地消」の推進 地元食材を使った子ども料理体験教室などを開催しています。



■旬の味わいをお手頃価格で「氷見三昧御膳」温泉のある民宿等での宿泊プランも好評です。



■新たな魅力「氷見振舞酒特区（どぶろく特区）」こだわりの自家製どぶろくを楽しむことができます。



■知名度の高い「氷見の寒ブリ」捕った直後に水氷でしめ、鮮度保持に努めています。



■中山間地の緑豊かな環境の中で育つ「氷見牛」肉質・鮮度・脂肪交雑の三拍子そろった逸品です。



■「忍者ハットリくん」も氷見の食をPR 作者の藤子不二雄[®]先生は氷見市出身です。

平成20年度総務大臣表彰受賞団体動画が完成

平成20年度地域づくり総務大臣表彰を受賞した29団体及び、平成20年度過疎地域自立活性化優良事例総務大臣賞を受賞した5団体の活動動画が完成し、センターホームページにて配信されています。

地域の個性豊かな発想を活かし、住民をはじめとしてさまざまな主体が取り組む、魅力あふれる地域づくりを積極的に推進する——。そうした試みに、顕著な功績のあった地方自治体、地域づくり団体及び個人の活動内容が紹介されています。

受賞団体の活動内容や関係者の生の声を聞くことができ、活字では知ることができなかった団体の取り組みを動画で見ることができます。

平成20年度 地域づくり総務大臣表彰 34団体の活動



地域づくり総務大臣表彰 29団体

- 団体表彰 (17 団体)
- 地方自治体表彰 (8 団体)
- 個人表彰 (4 組、5 名)

過疎地域自立活性化優良事例総務大臣賞 5団体

平成21年度 地域活性化事例集 地域資源を活かした地域の活性化

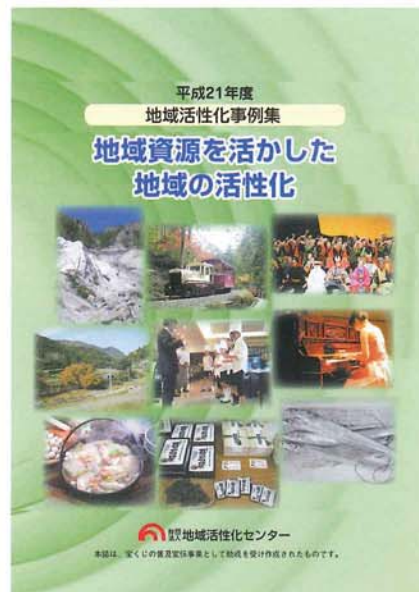
地方公共団体を取り巻く環境は現在、非常に厳しいものとなっています。こうした中、地域産業おこしや交流人口の増加、地域コミュニティの再生等を図るため、各地域に固有の自然、歴史、文化等のさまざまな「地域資源」を活用し、地域活性化を進める取り組みが、注目を集めています。

当センターでは、このような「地域資源」を活かした地域活性化の取り組み事例をまとめ、事例集を作成しました。この事例集は、全国の市区町村からあげられた195事例について、「地域資源」が発見・発掘される過程、取り組みの内容・成果、今後の課題や展望を中心にまとめました。

この事例集では、自然、景観、歴史、文化・芸術、特産品など、さまざまなものが「地域資源」として取り上げられ、各地域の特性を活かしたユニークな取り組みを紹介しています。

○価格2,000円（税込み・送料別）

●お問い合わせ先 総務部総務課 TEL 03-5202-6132



「地域づくり」編集委員の皆さん、お疲れさまでした！

▼地域を元気にしようと活動しておられる実践者の方からお話を聞くことができたのは貴重な経験でした。自らの視野が広がり、大切な財産となりました。ありがとうございました（**高山市、瀬戸みどり**）▼色々な地域を訪れ、そこで活躍している方々と直接お話することで、インターネット等で得る情報とは異なった情報を得たり、地域を良くしようという住民の熱意や思いがうかがえたのは、貴重な体験になりました（**沖縄県、平良真**）▼「地域づくり」の編集作業を通じて、今まで知らなかった事業や活動を知ることができました。取材で出会った方々とは今でも交流があります。この交流の輪を大切にしたいです（**綾瀬市、八塚桂介**）▼全国には、自分の知らないたくさんの素晴らしい取り組みがあることを知りました。取材先でお会いした方々の地元に対する情熱を忘れません！ありがとうございました。（**石川県、千葉雅恵**）▼取材

させていただいた団体の皆さんは、どの方も元気一杯に活動されている方ばかりで、お話を聞いているうちに、自分も元気を分けてもらえたように感じています（**徳島県、平田真一**）▼全国津々浦々、地域づくりに奔走する方々の、現場で活躍するという緊張感とリアリティを肌で感じることができました（**山梨県、有泉学**）▼取材した方々の自分の地域へ対する思いの強さや行動力、そして何より活動を楽しんでいる姿が印象的でした（**久留米市、永松克**）▼何もない地域は無い、ということを実感し、人の優しさと熱意に触れた一年でした。ありがとうございました（**長野市、松澤千尋**）▼取材のたびに、地域リーダーのモチベーションの高さや行動力に感動し、地域づくりにかける無類のパワーをいただきました。（**南ふるさとのおふくろフーズ、歌声列車の会、御前崎地区活性化地域協議会の皆さん**）のご発展をお祈りします（**福井市、齋藤誠**）

3月

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 3月4日(木)～5日(金)
秋田県雄勝地域振興局(秋田県)
- 3月9日(火)～11日(木)
宇土市観光物産協会(熊本県)
- 3月17日(水)～19日(金)
湯沢市(稲川物産観光協会)(秋田県)

★有楽町ふるさと情報プラザ

テーマ:「春・花・グルメの旅へ」

- 3月1日(月)～3日(水)
「来て!!見て!! 指定都市 花めぐり」
指定都市市長会
- 3月4日(木)～5日(金)
「春爛漫の南房総展 by南房総地域観光圏」
館山市(千葉県)
- 3月9日(火)～10日(水)
「三陸釜石の海の恵みをお届けします!」
釜石市(岩手県)
- 3月11日(木)～12日(金)
「ようこそ!花の都 咲いたまちへ」
さいたま市(埼玉県)
- 3月15日(月)～19日(金)
「米原市の自然と伝統工芸～お花畑・ホタル・木彫・真綿～」
米原市(滋賀県)
- 3月23日(火)～25日(木)
「成田の春・花めぐり～春を探しにちょっと出かけてみませんか?～」
成田市(千葉県)
- 3月30日(火)～31日(水)
「世界遺産 熊野古道のまち 紀州田辺の観光・物産展」
田辺市(和歌山県)

(写真)

- 1 1月6日(水)～8日(金) 仙北地域振興局(秋田県)
- 2 1月13日(水)～15日(金) 米沢市(山形県)
- 3 2月1日(月)～5日(金) 西目屋村(青森県)
- 4 2月9日(火)～10日(水) 厚木市(神奈川県)



4月

★ふるさと情報プラザ

テーマ:「黄金週間お楽しみプラン」

- 4月5日(月)～9日(金)
「信州木曾上松ふるさと森林体感展」
上松町(長野県)
- 4月12日(月)～16日(金)
「ウキウキ春のほほえみ “とよさとのイチゴ” をお届けします!!」
豊郷町(滋賀県)
- 4月19日(月)～23日(金)
「福井うまいもん市」
福井県



【編集後記】

▼今月号は平成二十一年度「地域づくり総務大臣表彰」の特集号です。一月十二日に行われた表彰式で、団体・個人および地方自治体(頑張る地方応援表彰)の各部門で、二十五団体・三個人が表彰されました。これら受賞団体・個人の活動事例を紹介しました。

▼この表彰は、魅力あふれる地域づくりに顕著な功績のあったまちづくり団体や個人、地方自治体を顕彰するものです。今回も都道府県などから推薦された中から、先進的な取り組み、独自性や継続性、地域への貢献度などを総合的に判断して、選定されました。

▼「大賞」に選ばれた旭川市は、全国的に有名な旭山動物園の所在都市です。廃園寸前から奇跡的な復活を遂げた「成功物語」はよく知られているところ。まちづくりの観点からも示唆に富む事例です。また、他の受賞団体・個人でも、興味深く、参考になる事例ばかりです。

▼人口減少社会を迎え、高齢化や過疎問題、地方経済の低迷など、地域が直面する課題は少なくありません。この中で、地域をより良くするために取り組んでいる団体・個人の活動には、今後も注目していきたいと思っています。

▼春は再び人事の季節。三月末で出向元に帰任する、地域活性化センター職員(編集委員兼務)の「ひと言」を紹介しました(センター通信欄)。取材にうかがった各地の団体にはお世話になりました。(原田)

【4月号予告】

特集II 生物多様性と地域づくり(仮)

地域づくり3月号

2010年3月1日発行 編集・発行=財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本/株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えします。情報サービス課(03-5202-6135)まで、ご連絡下さい。

福のキゲンは、一年間。

宝くじを買ったら早めに調べて換金しましょう。

当たり券、早く換金

大当たり

めでたい

やったー

一年すぎたらただの紙

支払い期限に注意

宝くじの収益金は、身近な街づくりに役立っています。



当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

財団法人 **日本宝くじ協会**

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>